長谷で電車を降りて、觀音堂の石段を登りながらも、彼女は次から次へとそんなことが考へられて、打消さうとすればする程、ブルジョアの娘といふ、一種の皮肉語が頭を持上げて來るのだつた。

それでも、いつもの通り觀音堂の前に額づいて、虎行の平癒を祈つてゐるうちに、瞳の頭は次第に平靜になつてゐた。――周圍のことなど、顧慮してゐる場合ではない。自分は唯ひと筋の道を、まつしぐらに進んで行けば、それでいゝのだ。と、いふ氣持が合掌祈願の胸に涌いて來たのだつた。

「――羨ましがられても仕方がない。あたしには虎行さんがあるんだから。……」

それにしても、ぢツと眼を閉ぢてゐる闇の中に、希望に燃える光は、到底待ち得べくもなかつた。遠くなればなるほど、螢火のやうに幽に漂ふ光のみが、唯一點、不安に明滅してゐるばかりであつた。

瞳は、いつものやうに、御堂の横手に廻つて、みくじを取つた。虎行の前途に對する、せめてもの希望は、醫者の言葉と同時に、朝毎に取るこのみくじに懸つてゐたのだつた。

吉と凶――如何にも心もとないことではあるが、瞳はいつも吉凶の分岐點に立つて、左右いづれからか襲つて來る豫言を、賴りにするより外になかつたのだ。

十八歳男――彼女はみくじを振る堂守に、いつもかう云つてから眼を閉ぢた。――戀愛などといふことは、どこかよその世界の出來事ぐらゐにしか思つてゐない、六十ばかりの頑固さうな堂守は、十錢の白銅を一つ受取ると、如何にも無造作に、みくじの箱を振つてゐたが、やがてそこへ出た竹箆の先を一

瞥すると、塗のはげた抽斗から、一枚の紙を摑んで、瞳の前に差出した。

三十一番末吉。――

鯤鯨未ノ變時　且守ニ碧潭溪ノ
風雲興ニ巨浪　一息過ニ天涯ノ

○ぐわんもう叶ふじせつをうべし○病人ながびく○うせものおそくも出づべし○待人おそく來る○やづくり、ひきこし、さはりなし○たびだち吉○よめとり、むことり、人をかゝへるよし

瞳はまづ、三十一番末吉といふ文字を見ると、ほツとした。昨日もおとゝひも、續いて出た凶のみくじに、かなり神經を惱ましてゐた場合だけに、急に眼の前が明るくなつたやうな氣がして、思はず堂守の方へ丁嚀に頭を下げたのだつた。

が、彼女はいつも、觀音堂へ參詣するといふことだけは、虎行に云つてはあるが、さて、みくじの事は、凶の出ることを考へると、豫め云ふ氣にもなれなかつた。從つてけふのやうな、未來のあるみくじが出た場合も、獨り自ら慰めてゐるより外になかつた。

十一

が、十のうちの殆んど八分通りまでが「凶」であるこの頃の例を破つて、たとへ末吉にもせよ「吉」

のみくじの出たことは、瞳に取つて、この上もない喜びであつた。いつも「凶」の出た時は殆んどまるめてしまうまでに、みくじを引ッ摑んで戻つて來るのが常だつた。が、けふは何か大事な密書でも命ぜられた使者のやうに、石段を降りながら、小さく丁嚀に折ると、ハンド・バッグの中へ仕舞つて、かうした場合、必ず安らかな心持で廻つてゆく、材木座から由比ケ濱への道を急いだ。

濱は非常な人出だつた。日曜日だけに、日歸りの人が大半を占めてゐたが、それが滯在客か、日歸りの人であるかは、一見皮膚の色を見れば、直に判明した。同じ白粉を濃く塗つた若い女性連でも、永い間海に親しんでゐた者は、その白粉の下に赤銅色の肌が光つてゐた。

渦卷のやうな海濱傘の林立。松竹のレヴュー以上に、群を爲した脚線の行列。それが砂丘を背景にして、眼のゆく限り續いてゐる。——瞳は、行きがけとはまつたく違つた輕い氣持になつて、燒けつく砂の上を歩いて行つた。

と、瞳がこの人魚群の中を拔けて、滑川の河口に近いあたりへ來かゝつた時だつた。彼女はつい眼と鼻の近くに、慶應の學生らしい二人を連れて、グリーン色の水着の上に、荒い紺の縱縞のマントを纏つた、姉の雪子を發見したのだつた。

「あッ！」

突嗟に出た雪子のこの驚きを、瞳は冷笑のうちに見守つた。

「お樂しみ。——」

「駄目よ、ひとちやん。誤解しちやア。」

「まア、何言つてんの。誤解はあんたぢやないの。あたし別に、ヘンな意味でお樂しみと云つた譯ぢやないわ。——でもいゝわねえ。學生の方と、暢氣に遊んでるなんか。……」

「お二人共、御近所の方だから、濱まで御一緒に來たんぢやないの。」

「そりやアあんたの御隨意よ。どこまでいらつしやらうと。あたし唯、お樂しみと云つただけのことなの。」

「そんな皮肉らしいことは、云はないで貰ひたいわ。」

「あんたは、ちつとも皮肉は云はない方だわねえ。甲府行の汽車ン中で、あんた一體あたし達に何んて云つて？　若い男と二人で旅行するなんて、田村家の家名に係はるから、止した方がいゝッて、隨分偉さうなこと云つたぢやないの。お氣の毒ですけど、あたしやまだ獨身よ。若い男と旅行しようが、年寄と遊ばうが、指一本指されるとこはないですからねえ。——あんたはどう？　長谷川卓爾さんて仰しやる方、ありやアどなたの御良人でしたつけねえ。」

「餘計なことを云はないで頂戴。」

「餘計なことぢやないわ。あんたの御主人と云ふのに、ちつとも不思議はないぢやありませんか。」

「ひとちやん。あなたは、飽までアたしに楯を衝く氣なのね？」
「楯も横もないわ。本當のこと云つてるんぢやないの。それともあんた、いつか、長谷川さんとお別れンなつたの？」
「お默り！」
「まア怖い。」そして瞳は、わざと學生の方を見ながら云つた。「近頃は、御亭主のある獨身婦人が到る處にゐるんで、油斷も透もありやアしないわ。」
「雪子さん、僕、先へ失敬しますよ。」
「僕も。」
「まア待つて頂戴よ。この人、出鱈目云つてるんだから、氣にしちや困るわ。」
「ほゝゝゝ、出鱈目はいゝわね。——御亭主と別れるのはイヤだし、浮氣はしたいし、蟲のいゝ人に會つちや叶はない。」
「も、もう一度云つて御覽！」
「何度でも。御亭主と、別れるのはイヤだし。……」
雪子の掌が、いきなり瞳の頰に飛んだ。
「どつこい。あたし、あんたの相手なんか、しちやゐられないの。——左樣なら。……」

十二

虎行の父坂本高行は、この一週間ばかり前から、何んといふこともなしに、夜間の睡眠が擘れなかつた。毎夜十一時には必ず臥床することにきめてゐたのであるが、床へ這入つてから一時間餘り讀書してさん〳〵視力を疲らせた上に、更に一本の麥酒を煽つて、こゝぞといふ汐時を見計らつた擧句、女中に團扇の風を送らせながら眼を閉ぢる。それ以外には眠る方法がなかつた。が、それでもいざ眠らうとすればする程、眼は益々冴えて、量り知れぬ不安が、次から次へと胸をおびやかした。

若い時から、暴力沙汰で外傷を負つた以外には、唯の一度として、病軀を提げて醫師の門を潜つたことがないだけに、不眠症のために診察を受るといふことは、如何にも男子の耻であるやうに思へて、敢て醫師を訪ねる氣にもなれないのであらう。外見の體格から云つても、更に年配から云つても、神經衰弱だとは考へられないところから、家人のすゝめも拒んで連夜の苦痛を忍んで來たのであつた。

接吻市場

が、「今に癒る」と、信じてゐたこの病勢は、日を經るがまゝに彌が上にも烈しくなつて、いまではまつたく、夜間は一睡も出來かねるまでの强烈さになつてゐた。

持つて生れた迷信家の高行は、おそらくこれを、何かのたゝりとでも思つたのであらう。人を派して易者に見せたり、行者を賴んで淨めを行つたりはしたが、さてそれが一向に利目がないときまつても、

やはり醫者の診察を受ける氣には、何んとしてもなれなかつた。

かうした時、常に高行の腦裡を離れなかつたのは、虎行のことだつた。五分間でも、十分でも、眠つたかと思へば、彼は必ず虎行の夢を見てゐた。――多くの場合といふよりも、その悉くの場合、高行の見る夢は、虎行の體が危期に瀕してゐる、その最期に近い場面だつた。彼は身を賭して救ひたいと焦つた。が、焦れば焦る程、もう一寸といふ瀬戸際で、虎行の體は彼の手から離れてしまうのであつた。

一昨日、高行はかねて依頼しておいた、石井私立探偵社の安住に、極力瞳と虎行との行方を、捜索してくれるやうにと頼んでおいた。もとより一度係り合つた事件の捜索だけに、流石に安住は三日と經たない今朝二人が、鎌倉にゐること、そして飽くまでも、瞳が自分自身を犧牲にして、虎行の繪の修行に盡力してゐることなどを、詳細調べ上げて來たのだつた。しかも安住は、口を極めて瞳を罵ることを忘れなかつた。

「――あの女、このまゝにしておいたら、どんなことを仕出來すかしれアしません。世間體だけは、坊ツちやんを守り育てて行くやうに見せてますが、なか〳〵そんな一筋縄で行くやうな、生優しい女ぢやありません。いまのうちに退治してしまはないと、飛んだ眼に會ひますぜ。」

が、高行は、どうしたものか、首を縦には振らなかつた。

「私には私の考へがあるから、もう何も云はんでえゝ。君は職業的の捜索さへしてくれれば、あとは私

がえゝやうにするから。」

「鎌倉へは、お出かけになりませんか。」

「それもまだ判らんよ。」

「では、折角これまで調査したことは、無駄骨になるぢやありませんか。」

「いや、心配には及ばんさ。私は早晩どうにか處分はする。だから今度私が呼ぶまで、君は社へ戻つてゐてくれ。」

その日の正午頃、安住が歸ると直ぐ、高行は東京驛を指して、圓タクを飛ばしてゐた。横須賀行、零時二十五分の列車に間に合せるために。――

十三

瞳が長谷の觀音のみくじを、胸の奥深くひそめて、由比ケ濱から滑川の川沿ひを、かなり安らかな氣持で歩いてゐたその時分、高行は、既に横須賀行の列車に乘込んで、一時間何分といふ距離を、矢鱈にもどかしがつてゐたのだつた。

常に政治と酒以外には、旅行にも運動にも、少しも趣味も持たない高行は、殆んど誰もが熟知してゐる鎌倉さへ、曾て十年程前に、某大臣の別荘を訪れた外は、まつたく足を踏み入れたことがなく、それ

がため一時五十何分かに、驛へ着いた彼は、虎行等が住むといふ、師範學校裏が、どの方角に當るのか、少しも知らなかつた。

俥上の人となつた高行は、正に村長の鎌倉見物といふ形だつた。海邊へ急ぐ人達の中を縫つて、俥上から物珍らしさうに、あたりを見廻してゐる圖は、いま時滅多に、多く見られるシーンではなかつた。

高行は默々として、俥夫の走るがまゝにまかせてゐた。やがて俥は、八幡宮の鳥居前を右手に折れると、一曲りばかり鍵形に曲つて、間もなく小さい洋館建の家の前に梶棒をおろした。

「田村寓」と青い油繪具で筆太に書かれた標札を横に見ながら、金五十錢を俥夫に與へて歸すと、高行は暫し躊躇してゐたが、やがて標札の下に附いたベルのボタンを押した。

一度長谷の觀音堂から戻つて來て、今し方起きたばかりの虎行と、メロンを食べてから、再び高行に出す手紙を、カルメンに託すべく出掛けて行つた瞳が、まだそこらあたりの松原の中を歩いてゐる時分であらう。虎行はベッドの上に仰向になつて、何を讀むともなしに、婦人雜誌の頁を繰つてゐた。と、彼は頭上に、かなり强いベルの音を聞いたのであつた。

初めそれが、短くして止んだ時、彼は訪客の誰であるかを考へた。ベイちやんにしても、お民にしても、おゑんにしても、その大方は玄關のドアに錠がおりてゐる場合は、大抵そのまゝ歸つてしまうのであるが、それにも拘はらず、敢てベルを押すとすれば、或は先刻の酒井俊太郎が、魔醉から醒めて取つ

て返したのではないかと思つた。もしさうでないとすれば、仲間の者以外に、この家を知つて居るのは、商家の御用聞より外にはない筈だつた。

再び、今度は長くベルが鳴り渡つた。虎行は危く「はい」と返事をしようとしたのを、ぐツと咽に押込んで、ベッドから立ち上つた。

窓の摺硝子の上が二分ばかり隙いてゐる。その隙間から、彼は籐椅子の上に膝で立つて、玄關先を窺いて見たが、そこには、鐵色の羽織が少し見えるだけで、訪客の誰であるかを見極めることは困難だつた。唯客が洋服でない處から、俊太郎と違ふことは慥だつた。

「御免！」

ベルが通じないと思つたのであらう。今度は相當大きな聲でおとなふのが聞えた。

「どなたですか。」

虎行はわざとドアを開けずに、かう尋ねた。

「おゝ虎行ぢやな？」

「え！」

「私ぢや。私ぢやよ。」

「あツ！」

その聲を聞くと同時に、虎行は忽ち眼の前がまツ暗になるのを覺えた。
「どうしたのぢや。こゝを開けてくれんか。決して心配せんでもえゝ。私はお前を責めるために來たのではない。會ひたうなつて來たのぢや。速う開けてくれ。」
「……」
「虎行！　お前には、私の心が判らんのか。私は獨りで、わざ〳〵お前を訪ねて來たのぢや。考へることはない筈ではないか。決して責めも叱りもしはせん。安心して開けてくれ。」
「……」
「おい、どうしたのぢや。」
すると中から、漸く絞るやうな聲が聞えた。
「お父さん！　折角ですが、僕は、お目に掛れません。」
「何んぢやと？」
「僕は、あなたに叛いた子です。」
そして暫しの沈默の後、突然窓際に、虎行の歔欷の聲が聞えた。

十四

「虎行！　お前は私がかうして訪ねて來たことを、誤解しとるのぢやな。」
首差し伸べた大輪の日向葵が五六本、窓硝子に接觸したその下に、暫し眼を閉ぢてゐた高行は、稍あつてかう云ひながら、興奮に顫へる手で、強くドアを叩いた。
「決して、決して僕は、誤解などしてはゐません。ですけど、いまは僕どうしても、お父さんには、お目に掛れないんです。」
「そ、それが誤解ぢや。子として親に會へんといふ法があるか。――叱りはせん。決して叱りはせんから、こゝを開けろ。」
「どうかお父さん、赦して下さい。僕にはどうしても、そこは開けられません。」
「虎行！」
「……」
「お前には、私のこの心が、判らんのか。」
「判つてゐます。判つてゐますが、僕には僕の決心があるんです。お願ひですから、この心持をお察し下すつて、けふはお歸り下さい。――僕だつて、お目に掛りたいのは山々なんですが、世の中には、心とまつたく反對の行爲を、しなければならない場合もあるんです。」
「そ、それは虎行、他人に云ふことぢや。親子の間に、心と行爲とが、相違するやうなことがあつてよ

いものか。何んでもえゝ。私はお前に會ひたい。速くこゝを開けてくれ。」
「お父さん、お願ひです。お願ひですから、僕をこの上苦しめないで下さい。」
「苦しめて居るのはお前の自業自得ぢや。何も少しも苦しむことはない。開けて私に會うてくれ。」
虎行は、遂に耐へられなくなつたのであらう。窓際から離れると、いきなりベッドの上に、倒れるやうに突伏してしまつた。
「虎行！」
「……」
「お前は、飽くまで親を捨てるのぢやな。」
「……」
「その、お前の體を流れて居る血は、私の血ぢやぞ。お前がどこまで、私に叛かうとしても、同じ血潮だけは、代へることが出來んのぢや。——私はきのふまで、不幸者のお前を、どれ程憎んで居つたか知れん。しかし私は、病んで初めて、子に對する愛の强さを、心の底から感じて來たのぢや。」
「では？」と、虎行は頭を擧げた。「お父さんは、病氣なのですか。」
「病氣ぢや。」
「おゝ！」

虎行はがばと跳ね起きて、再び窓際へ走り寄つた。
「私はこの數日間、一睡もして居らんのぢや。——しかし、お前が飽くまで會へんといふなら、止むを得ん、このまゝ東京へ戻るとせう。」
「お父さん。——」
「……」
「どうか、僕の心持を、お察し下さい。」
「いや、辯解はいらん。病軀を提げて、わざ〳〵訪ねて來た親を、そのまゝ歸すやうな悖に、なまじの愛情を覺えたのが、私の不覺ぢや。——せめて、お前を捕虜にして居る、田村の娘にだけでも、會ふて行かうと思ふたが、それも甲斐ないことぢやらう。私は歸る。もう再び、お前にも會はんかも知れん。しかしどこに居つても、體だけは大切にするがえゝ。」
「……」
接吻市場
高行の和服姿が、日向葵の蔭に動いた。と、その瞬間、脫兎のやうにドアを排して、走り出たのは虎行だつた。
「お父さん！」
高行の袖は、虎行の掌の裡にあつた。

光
よ
い
づ
こ

「えゝから放せ、私は歸る。」
「赦して下さい！」
さう叫んだ刹那、高行の視線は、蒼白に衰へた虎行の顏を射てゐた。
「お前、病氣したか。」
「いゝえ。」
「痩せ居つたのう。」
高行は、悵然として視線を反らせた。

留針の先

一

九月初めの陽が、斜めに硝子窓を射てゐた。瞳達の一行が去つてからの、鎌倉扇ケ谷の聚樂莊には、三日に一回づつ、東京へ事務を見にゆくだけの仕事しか持たない酒井德兵衞が、過去の一ケ月に亙るエロチックな生活のために、身心共に疲れ果てた體を、醫藥に依つて回復せしむべく、その道の專門醫、醫學博士羽室貞次を聘して、あらゆる療法を施行して貰つてゐた。

けふも德兵衞は、遊びがてらにやつて來た羽室博士の、診察が濟んでしまうと、わざ〳〵海濱ホテルから取寄せた夕食を、日の暮れ切らないバルコニーに運ばせて、そこでフォークを動かしてゐたが、食事が終る時分から、妙に眠氣を催して、いつもならば、博士の巴里仕込の猥談に、時の經つのも分らずに

接吻

ゐるのを、それさへ聞く根氣もないらしく、博士が歸るのを待ちかねたやうに、ついと寢室へ這入つてしまつたのだつた。

市場

德兵衞が寢室へ這入ると殆んど同時に、溜池のダンサー內田玉枝を連れて、京濱國道をドライヴして

來たのは悴の俊太郎であつた。彼は一ケ月前に、暴ばれ込んだ瞳の家で、思ひ掛けない返り討に會つて以來、ひそかに機を狙つてゐたのであつたが、いつの間にやら瞳が、虎行と共に鎌倉を引上げてしまつた爲めに、何んとすることも出來ず、初めのうちこそ相當血眼になつて、その行方を捜つたものの五日經ち十日經つうちにいつかその根氣も失せて、そんなことより醉つて踊るにしかずとばかり、溜池のダンサー内田玉枝のエロ味に、すつかりまゐつてしまつたのだつた。

俊太郎はこゝ一週間ばかり、殆んど會社へは出なかつた。麹町山元町の家で、朝十時頃に眼を覺すと、玉枝の下宿先の呼出電話、青山の一四五番へ、まづ女中に電話を掛けさせて、父の自動車が空いてゐるのを幸ひ、矢鱈にそこいらを乘廻しては、夕方になると、玉枝を溜池のホールへ送り込むのが、日課のやうになつてゐた。

時には、身體の具合が悪いなどといふと、よく玉枝を休ませて、横濱のニュー・グランドあたりへ、夕飯を食ひに行くこともあつた。そんな時、彼は必ず自動車をそのまゝつツ走らせて、ひそかに父の別莊へ潜り込むことになつてゐた。

この日も二人は朝から車を駈つて、武州大宮を振り出しに、あれから相模川を渡つて厚木を廻り、大磯戸塚を逆行して、藤澤から鎌倉に這入つたのであつた。

流石に家の前までは乘着けなかつたが、それでもかなり近くで自動車を棄てると、二人は肩をならべ

て玄關から這入つた。

「ゐるのか。」

出迎への女中に、親指を出してかう訊ねた俊太郎は、その間も、玉枝の肩に掛けた手を離さなかつた。

「ゐらつしやいます。」

「部屋か。」

「もうお休みでございます。」

「寢た？」

「はい、唯今羽室先生がお歸りンなりますと、直ぐに寢室へお這入り遊ばしまして。……」

「そいつアいゝや。——玉ちやん。天は飽くまで我々の味方だね。」

「さうねえ。二人の眞實が、天に通じたからよ。」

「まつたくだ。——まア兎に角、バルコニーへ出ようぢやないか。親父が寢たとなりやア、もうこつちの世界だ。」

「でも大丈夫？」

「安心おしよ。萬ケ一目附かつたつて、他人の家ぢやない、親父の家ぢやないか。——おい、バルコニーへ、何か冷いものを持つて來てくれ。」

接吻市場

女中にかう命じておいて、二人は浮いた氣持で階段を昇つて行つた。

二

「こゝ初めてだけど、とてもいゝバルコニーねえ。あたし、すつかり氣に入つちやつたわ。」
「おだてたつて駄目だよ。こりやア僕の家にや違ひないが、今ンところ、僕一分、親父九分といふ寸法なんだからなア。」
「だつていゝわ。いまにどうせ、俊様の物になるんだから。……」
「そりやア將來は、僕の物になるさ。——まアそんなことはどうでもいゝから、そこへお掛けよ。」
「えゝ、有難う。——海がよく見えるわねえ。」
「親父が自慢で建てただけあつて、眺望は相當なもんだが、僕には景色なんか、どうでもいゝんだ。」
「あんなこと云つて。——あたし景色のいゝ方が、どんなに嬉しいか知れないわ。」
「僕と一緒にゐるよりもかい。」
「あら、さういふ意味ぢやないのよ。あんたと一緒にゐて、その上景色がよけりや、これに越したことはないの。」
「とても贅澤だね。」

「贅澤ぢやないわ。第一にあんた、第二に景色、第三にお食事。——」
「僕は違ふな。第一には、やツぱり玉ちやんだが、第二には景色なんかより、金だよ。そして、第三とか第四とか、第五とか、そんなものは何んにもいらないんだ。」
「ほんたうに、第一はあたし？」
「ほんたうさ。嘘だと思つたら、ちよいとこつちへ來てごらん。」
「來たわ。」
「僕の膝の上へお掛けよ。」
「かう？」
「で、かうやつて。……」
「あら、誰か來るわよ。」
「來たつていゝぢやないか。みんな僕の家の召使だもの。」
「でも、キッスなんかしてるとこ、見られたら羞かしいわ。」
「だつて君は、ホールにゐると、あんな大勢の前で、平氣でダンスしてるぢないか。」
「そりやアあんた、ダンスしたつていゝぢやないの。」
「そんならキッスしたつて、いゝぢやないか。キッスをするのも、ダンスをするのも、男と女とがお互に

滿足するんだから、ちつとも違ひはない譯だぜ。」
「違ふわ。」
「どうして？」
「どうしても。」
「どうしてもぢや判らないよ。」
「だつてさうぢやないの。ダンスは職業だし、キッスは愛ですもの。」
「ダンスは職業？」
「さうよ。」
「僕と踊つてる時もかい？」
「あんたと踊つてる時は、半分くらゐ職業。——」
「馬鹿にしちやいやだぜ。半分職業で踊つていゝか。」
「仕方がないわ。職業意識ツて、とてもひどいンですもの。でも、その強い職業意識を、半分なくなせるのは、相手が俊様だからよ。外の人だつたら、まるで職業意識だけだわ。」
「さうでもなささうだぜ。あの植松と踊るときなんか、ヘンに息をはづませたりして。……」
「あら、ひどいわ。あたし俊様の外に打込んで踊る人なんか、一人だつてありやアしないわ。」

「どうだかなア。」
「ひどいわ。そんなインチキすると思つてらツしやるの？」
「少しはするだらう。」
「憎らしい。どの口で、そんなこと仰しやるのよ。」
「この口で。……」
「この口？」
俊太郎の口は、十字型に、玉枝の唇で掩はれた。
長い沈默。——漸く暮れかけた、雀色のたそがれが地に陷ちて、あたりは薄墨の中に、靜かに蟋蟀の音が流れそめた。
松の葉末に月の懸つた鎌倉の九月は、既に秋だつた。

三

俊太郎と玉枝とが、聚樂莊の一室で、歡樂の夢を追つてゐた、丁度その頃、警視廳の刑事二名は、東京驛から同じ横須賀行の三等車に乘つて、鎌倉警察へと急いでゐた。
それは最近勃發した、文化土地株式會社社長酒井德兵衞に對する、詐欺横領罪の告發に因つて、突

然檢事局から起訴された、德兵衛に取つては、夢想もしない問題だつた。

その一つは、東京府下神代村字下仙川の、福永龍雄の所有土地八千坪の横領事件、他の一つは、目下銀座に建築中の映畫劇場「中央座」に對する、千五百株の僞造詐欺事件であつた。

これには、德兵衛の外戚に當る前政府の某高官なるものが關係してゐた。(作者は新聞の例に慣らつて矢張こゝに某高官とのみ記しておく。)いふまでもなく、背後にこの高官が存在してゐた爲めに、德兵衛は勞せずして、脫法的らしい行爲の下に、巧に兩者を捲上げたのであつたが、被害者の告發によつて、警視廳で取調べの結果、包むに由なき罪狀は、芋蔓のやうに、後からく〳〵と暴露されたのであつた。

二人の刑事が酒井德兵衛に對する興味は、さうした横領事件よりも、寧ろこの頃噂に聞いた、百人のエロチック・ガールを集めて、人魚の眞似をさせるといふ、それにあつたらしい。だから、列車へ乘込んだ二人の會話は、主としてその事にのみ向けられて行つた。

實際、刑事として一番興味のある捕物は、女の混じつた賭博ださうだが、その次に位するのは、何んと云つても女中心の、エロチックな事件に外ならない。强盜は、如何程武勇の勝れてゐる刑事に取つても、苦手だつた。殊にピストル强盜に到つては、その道の猛者であればあるだけ、面白くなかつた。まかり間違へば命が玉なしであるばかりでなく、妻子まで路頭に迷はせなければならない。そこへ行くと、女を中心にした事件には、何んと云つても色氣がある。こっちの生命を考へる必要もなければ、危險に

怯える心配もない。「權柄盡」といふ言葉をそのまゝ踏込めば、落花狼藉の光景を、目のあたり見られるだけでも、大した役得だつた。

二人の刑事は、(これを假に大森、高瀨としておく)もちろん今でも、扇ケ谷の聚樂莊に於ては、連夜噂の如き人魚のダスンが、繰返されてゐることと信じてゐた。それゆゑ德兵衛をしよツ引く前に、先づその奇怪なる光景に接して、單に風俗壞亂の罪だけでも、十分彼を引致することが出來るだけの、確證を握つておかうと考へたのであつた。

二人は周圍に聞えないやうな、極めて小聲で喋り續けた。

「ほんたうにその別莊には、百人なんて女が飼つてあるのかなア。」

「百人はゐまい。おれの考へぢや五十人ぐらゐだと思ふ。」

「そいつがみんな、裸で踊るとすると、なかく凄いもんだな。」

「部屋の中が、一面の鏡張だといふから、ほんたうに見たら堪らないだらう。」

「そりやア堪るまい。だが、德兵衛といふ奴は、そん中に、たつた一人で見物してるんだといふぢやないか。」

「さうだとよ。太え爺だなア。」

「一人や二人、妾がまじつてるんだらう。」

「ゐるかも知れない。何しろ他人の金でやつてる仕事なんだから、どんなにだつて、贅澤は出來るだらう。」

「贅澤は仕放題だ。でも、もう駄目だ。いや應なしに、二時間ばかりの命だからなア。」

「百人、ぢやない、五十人も、裸で踊つてるその中へ飛込んで、名刺を突附けた時のことを考へると、おれ達も隨分派出な商賣だなア。」

「派出だなア。もうこれでざつと十年にもなるが、それだけの舞臺は今度が初めてだよ。」

「おれも初めてだ。こんなことがあるから、手當が少くつても、止められないんだな。」

「違ひない。鎌倉署の刑事も、同じやうに待つてるだらう。」

「前祝ひだ。茶でも買はうか。」

「さうだ。大船へ着いたら、鮎鮨でも買うとしよう。」

四

大森、高瀬の二刑事と、鎌倉署の浪川、三原の四人が、扇ケ谷の聚樂莊を訪れたのは、午後八時だつた。德兵衛は既に昏々と眠つてゐたし、俊太郎と玉枝とは秘樂の疲れから、腐つた河豚のやうになつて、二階の部屋で茹つてゐた。したがつて、刑事の自動車が玄關先で停つた事も何も、少しも知らなかつた。

玄關のベルを押したのは、鎌倉署の三原刑事だつた。が、おそらくは雇人達も、主人の不しだらを眞似て、はや寢室へでも這入つてしまつたのであらう。最初のベルの音に對しては、何等の返事もなかつた。

「變だな。應へがないぞ。」

「いや、確にゐる筈だ。驛で調べた時も、昨日歸つて來たまゝ、東京へ出かけた樣子はないさうだ。」

「では騷いでゐて、聞えんのかも知れん。」

さう云ひながら三原刑事は、再び指先へ力を罩めて、ベルを押した。と暫らくして遙の奥から、スリッパの音が聞えて來た。

「來たやうだぞ。」

その足音を聞くと、浪川、高瀬の二刑事は、糸に操られた機械の樣に、直ぐに裏庭の方へ廻つて行つた。玄關のドアが開いて、顏を出したのは、小間使らしい十七八の女だつた。

「御主人はお宅ですか。」

「どなた樣でございます。」

「いや、それよりも、お宅でせうな？　確に。——」

「はい。」

小間使ひは、急に疊みかけての質問に、かなりあわてたらしく、どぎまぎしながら頷いた。
「ではちよいと、お目に掛りたいと云つて下さい。」
「はい。――あのう、失禮ですけど、もうお寢み遊ばしましたから、急な御用でございませんでしたら、また明日にお願ひいたしたいのでございますが。……」
「さうですか。お寢みですか。」
「はい。お寢みンなつてからは、たとへ會社の方にでも、お目に掛らないお規則になつて居りますので。……」
「そりやアどうも」と、大森刑事が苦笑した。
「お氣の毒ですが、私達は警察の者で、直ぐにお目に掛らないと、いかん事が出來たのですから、一寸取次いで下さい。」
「警察のお方？」
小間使は、大森刑事が差出した名刺を手にして、名刺と刑事との顏を、等分に見守つてゐたが、やがて、恐る〳〵頭を下げた。
「どういふ御用でございませう。」
「用事は君に云つても判らない。心配することぢやないから、直ぐ取次いで下さい。」

「はい。」
小間使の足音が消えてしまうと、兩刑事は顏を見合せて苦笑した。
「なか〳〵忠實な女中だな。」
「我々を、暴力團か何かと思つて、最初は警戒し居つたやうだな。」
「だいぶゆすられて居ると見えて、それが一番怖いのだらう。」
間もなく小間使と共に、速足に、奥から出て來たのは、おそらく德兵衞の用心棒でもあらうか。三十七八の、骨組のがつちりした男だつた。
彼は體に似合はず、玄關先へ出ると、惡丁嚮に頭を下げた。
「いらつしやいまし。」
「あなたはどなたですか。」
「はい。私は、當家の執事山西剛でございますが、何か主人に御用と承はりまして。……」
「あんたではいかん。我々は酒井德兵衞さんにお目に掛りに來たのだから。……」
「それが生憎、主人は先刻から發熱いたしまして、唯今熟睡中でございますので。……」
「熟睡中？」
「はい。」

「職權です。起して下さい」と、大森刑事の聲は鋭かつた。
「どういふ御職權で？……」
「白ばツくれてはいかん。我々はいま、女中の人に名刺を出した警察の者です。」
「警察の？」
二人はそのまゝ玄關から踏込んだ。

五

玄關先の物音に、ふと鎌首な揚げたのは、俊太郎と玉枝だつた。二人は何か夢中で、急に跳飛されたやうに、肚の底がびくツとした。
「何んでせう、あの音？」
「何んでもないよ。山西が近所の若い衆でも呼んで來て、これから將棋を始めようといふんだらう。」
「そんなんぢやないやうよ。――ほら、速く主人のところへ案内しろツて、あんな凄い聲が聞えるぢやないの。」
「あツ！」
「どう？　さうぢやない？」

「這入つたな！」
「何よ？」
「泥棒かも知れない。」
「泥棒？」
思はずかう叫んでから、玉枝はあわてて、右手で口を塞いだ。
「しツ！」
「どうしませう？」
「大丈夫だ。鍵さへ閉めてしまへば、この部屋へは這入つちや來られないから。……」
「ほんたうに大丈夫？」
「黙つて！」
亂れた數人の足音が、やがて廊下のドアに近着いた。――二人はぢつと息を殺して、ソファーにしがみ附いてゐた。
「愈々親父の部屋へ行つたんだ。」
「お父さんのお部屋つて、近いンぢやないの？」
「廊下を突き當つて、曲つたところだよ。だから、こゝにさへゐれば。――」

しかし、さうは云つたものの、俊太郎は流石に父の身の上が心配だつた。豫測通り强盜だとすれば、少くとも二三人はゐるに相違ない。あの、かなり無鐵砲な、用心棒の山西さへ、拒むことが出來ない相手だとすれば、相當、或は相當以上の兇器を持つてゐるだらうが、父の萬ケ一の場合を考へると、このまゝ自分達の安全のみを、考へてもゐられないやうな氣もして來た。

「駄目よ。どこいくのよ。」

「どこへも行きアしない。」

「行かないでよ。あたし怖いから。……」

が、それでも俊太郎の足は、ドアの方へ向いてゐた。

徳兵衛は、死んだやうになつて眠つてゐるところを、大森、三原の兩刑事を案内して來た山西のために、搖り起されてゐた。兩刑事は徳兵衛の興奮を避ける爲に、山西が彼を起すあひだ、ドアの外で待つて居た。

「旦那樣！　旦那樣！」

「うむ。」

「お客樣です。」

「お客？　馬鹿、夜の來客には會はんからと、あれ程云つてあるぢやないか。斷つてしまへ。」

「それは萬々承知して居りますが、お斷りすることの出來ない方だもんですから。……」

「いかん、いかん。私の命令だ。斷ることの出來ん客など、ある譯はない。また明日來てくれと云つて歸せ。」

「はい」そして山西は、そツと徳兵衛の耳へ口を當てた。「警察の奴等です。お會ひにならないと、却て面倒でせう。」

「警察の？」

徳兵衛の聲は、思はずあたりに響いた。——　山西は再び普通の聲に返つた。

「わざ〳〵警察の方が、いらしつたんです。」

「さうか。警察の方か。それならさうと、なぜ速く云はんのぢや。勿論お目に掛るとも。こんな寢室では失禮ぢやから、應接間へ御案内申しておくがえゝ。」

と、二人の刑事は、直ぐにドアを排して、徳兵衛の寢臺に近着いた。

「お寢みのところを失禮ですが、今晩これから、東京まで御同行願ひたいと思ひまして、お迎へに伺ひました。」

「これから東京へ？」

「さうです。これが檢事局からの令狀です。」

「検事局？」

徳兵衛は、急に額の皺を深くした。

六

その間、父の寢室のドアの鍵穴から、一切の様子を見聞してゐた俊太郎は、それが豫想してゐた如く強盗でなかつたのに、聊かの安心を得たのも束の間、相手が警視廳並びに鎌倉署の刑事等であることを知るに及んで、俄然恐怖が、胸を打たずにはおかなかつた。

彼は丁度、カンカン蟲と稱する船の錆を削る職工が、危く海へ落ちようとする體を、舷側にしがみ着いて支へてゐるやうに、壁際に身を支へて室内の様子を凝視してゐたが、やがて嚴然として刑事の口から、檢事の令狀を持參したと聞くと同時に、今は殆んど夢中になつて、その中へ飛込んだのであつた。

「ちよ、ちよいとお待ち下さい。」

「何んだ貴様は？」

大森刑事の手は、素早く俊太郎の手首を掴んでゐた。

「ば、僕は、酒井徳兵衛の倅です。」

「倅が何しに來たんだ。公務の妨害をすると、爲にならんですぞ。」

「妨害ぢやありません。僕は一言だけ、あなた方に申上げたいんです。」

「我々に云ふことがある？」と、今度は三原刑事が乘り出した。

「あなた方に、父の子として、申上げたいんです。――第一、父は警察の人に、指一本指されるやうな、非行をしては居りません。しかも現在は病體なのです。それだのに、それだのに夜、突然拘引するなんてことは、無茶ぢやありませんか。僕はこんな事が、人道上許されるとしたら、由々しい問題だと思ひますね。」

「なんだと思へば、下らんことは云はんでくれたまへ。署の命令によつて同行するからには、いふまでもなく、濃厚な嫌疑があるからぢやないか。非行があるかないか、そんなことは、出るとこへ出てから云つて貰へば事が足りるんだ。君など、餘計なところへ出しやばらんがいゝ。」

「餘計な所ぢやありません。僕は正當な主張を云つてるんです。」

「では、飽まで君の父親を、我々に渡さんと云ふのか。」

「さう云ふ譯ぢやありませんが、何も病人を無理に、東京まで連れてくことはないぢやありませんか。」

「多勢の女を集めて、ダンスをさせる病人がどこにあるか。下らん抗辯をすると、益々立場が惡くなるぞ。」

「俊太郎！」と、初めて徳兵衛の聲が鋭かつた。「お前は默つて居れ。この人達に何をいふても無駄ぢ

や。私は出る所へ出て、身の潔白を申述べる。」

「しかし、明日でも濟む事ぢやありませんか。こんなにおそく、わざ〳〵東京まで行かなくても。……」

「君！」と、大森刑事が冷笑した。

「君は高等教育を受けて居るくせに、檢事局の令狀が、どんなものであるかぐらゐ、知らん筈はなからう。少しは考へて見たまへ。」

「そりやア知つてますよ。しかし突然夜中踏み込んで來て。……」

「そんなことは、君の指圖を受けることぢやない。」そして刑事は德兵衞の方へ振り向いた。「よければ仕度をして下さい。自動車が門前に待たせてありますから。……」

德兵衞はそれには答へないで、山西の方を振り返つた。

「しげに、私の着物を出すやうに命じてくれ。袴も一緒にぢや。」

「はい。」

「ではお父さんは、やつぱりいらつしやるんですか。」

「行く。しかし心配はいらん。明日はどんなことがあつても、必ず戻つて來る。私には一點の、後ろ暗いところもないのぢやからな。」

「さうですとも。僕だつて、お父さんに後ろ暗いところのないのは、よく知つてるんです。——警察なんてものは、何んだか判りもしないうちから、當然のやうに、罪人扱ひにするんだから、堪つたもんぢやない。」

かうした樣子を、ドアの鍵穴からひそかに窺いてゐたのは、ダンサーの内田玉枝だつた。彼女に取つては、この事件は、心配でも何んでもないひとつの探偵小説的興味に外ならなかつた。

七

お客と藝者——資本家と勞働者——それ程の關係でないまでも、俊太郎に對する玉枝は、底を割つて見れば、愛でもなく戀でもない、云つて見ればダンサーと客との（それも札びらを切る甘い客との）關係以外には、實際一歩も出てはゐなかつたのだ。だから、突然降つて湧いたやうな、檢事局の令狀事件などが起つたとなれば、なまじつかの金に換へられるものではなく、長居して捲添へを食ひでもしたら、職業身分から云つても、三週間の拘留は知れ切つてゐた。で、彼女は實に刑事連以上に素早く、單身扇ケ谷の聚樂莊をぬけ出すと、折からそこに居合せた酒井家の運轉手に、さも酒井家の急用でも引受けたやうに裝つて、東京行のドライヴを命じたのであつた。

日頃「日向葵」のニック・ネームを持つ玉枝は、一見、如何にも晴々しい華やかさがあつた。それがためか、運轉手は一も二もなく、これを良家の令孃で、若主人の許嫁者ぐらゐに信じたのであらう。鎌

倉街道はさることながら、京濱國道へ出ると、五十哩近くのスピードを出して、刑事事件からの逃走には、如何にもふさはしい目覺ましさを潑溂たらしめた。

マツダ・ランプのネオン照明。萬年筆や金線サイダーの五色線光。それらを車窓に走らせながら、自動車はまつしぐらに、品川を新橋へとつツ走つて來たのだつた。

「どちらへお着けいたします。」

「さうね。いゝから、尾張町の角まで行つて頂戴。」

車が銀座の交叉點まで來ると、玉枝はそこで徐にドアを排した。

「これを。……」

チップに出した四枚の五十錢銀貨。

「いゝえ、こんなことをして戴きましては。……」

「いゝから取つといて頂戴。その代りほんのおしるしだけよ。」

「ですが、主人に知れますと、それこそ。……」

「まア、なんて臆病なの？　あたし、こんなこと、誰にも云やしないわ。」

「濟みません、どうも。——どちらでお待ちいたしませう？」

「いゝわ、もう歸つても。唯、俊さんには、あたしがこゝで降りたことは、内所にしとくのよ。」

「へえ。」

聊か不審らしい顏付をしてゐる運轉手を尻目に掛けて、交番のうしろから江島印房の前へ出ると、そのまゝ玉枝は、數寄屋橋の方へと大股に歩いて行つた。

「さア、どこへ行つて飲まうかしら？」

鎌倉への行きがけに、俊太郎から貰つておいた、五十圓といふ金があるだけに、もちろん今夜これから溜池のホールへ戻つて、踊る氣にはなれなかつたし、それかと云つて、風通しの惡い下宿の二階へ歸つて、寢てしまう氣にもなれなかつた彼女は、京濱國道をドライヴしてゐる中から、どこか、銀座あたりで飲んでやれ、といふ氣持が動いてゐたのだつた。

玉枝の眼には、その邊に幾軒となく軒を列べたカフェーやバーが、次から次へと展開された。映畫の連中や、藝術家をもつて任ずる、頭の毛の長い連中が、ワンサと出沒する銀座裏のさうした店は、殆んど半ば以上彼女の馴染だつた。

「今夜はひとつ、うんと飲んで、うんと醉つて、誰か知らない人に介抱させてやりたいんだけど。……そんなのには、どこがいゝかしら？……」

さう考へながらも、玉枝は一ケ所には立停つてゐなかつた。

「あゝさうだ。どつかから、今村さんに電話掛けてやらう。あの人この頃、俊さんと、とても背中合せ

だつていふから、ちよいと面白い氣がするわ。」

玉枝の足は數寄屋橋の手前の廣い横丁を左へ曲ると、近くの自動電話へと急いだ。

「玉枝さん！」

「あッ！」

「いやにせかくしてるぢやないか。どこへ電話を掛けるんだい。」

八

それは溜池ホールにきのふまでゐて、新らしいダンサーに、妙な親切をしたところから、斷然首になつたばかりの、半ちやんといふ、今年徵兵檢査が濟んだばかりの、煙草賣だつた。——半ちやんは、半五郎でもなければ半造でもない。その顏が半ぺんの如く四角いところから、誰いふとなく通り名になつた、その半ぺんの「半」の字に外ならなかつた。身の丈四尺九寸二分、體量十一貫フラットといふのだから、相當見た目からして可笑しい存在だつた。

が、半ちやんはませてゐた。何もかも知り拔いた立派な大人だつた。彼は玉枝を見ると、好人物らしい顏をして、ニヤリと笑つた。

「どうしたのよ、半ちやん。今頃こんなとこを一人で歩いて？」

「間違ひちやいだぜ。どうしたは、こつちのセリフだよ。玉ちやんこそ、こんな時間に、こんな所で電話を掛けようなんて、怪しいぜ。」

「あたしや立派なもんだわよ。これから伯母さんを誘つて、エー・ワンあたりへ、御飯を食べに行かうと思つてたんだもの。」

「伯母さん？　そんな手、もう古いぜ。誰なら誰ツて、はツきり申上げた方か、罪は輕いぜ。」

「いやだよ、この人は。氣を廻されちや立つ瀨がないわ。ぢやア仕方がない。まだ電話を掛けちやつた譯ぢやないんだから、伯母さんを呼ぶのは止すわよ。その代り、あたし一人なんだから、あんたつきあふのよ。」

「お！　ほんたうかい、玉ちやん。何んだか變だね。」

「變ならお止しよ。折角人が誘つてやるのに。——それともあんた、お腹空いてないの？」

「腹は空いてるさ、今朝食べただけなんだもの。」

「今朝ッ？」

「あゝ。だからどつかのおでんやぐらゐで、茶飯でも搔込まうと思つてたところなんだ。何しろこゝに十錢玉が二つと、バットが一箱あるきりなんだからね。」

「いやんなつちやうね。ゴルフ・パンツを履いたモダーン・ボーイが、だらしがないぢやないの。」

「自分でも、さう思つてるんだが、あすこを首ンなつたばかりだからね。およそ半ちやんの不況時代の第一夜なんだよ。でも功徳だぜ。こんな時に救つて置くなんてことは。——」

「もういゝわよ。判つたから、一緒に附いといでよ。」

「濟まない。」

ポンと一つ額を叩いた半ちやんは、子供のやうな小さな體を、辱も外聞もなく小刻みに運んで、玉枝の後に附いて歩いた。

「だが一體、玉ちやんは何處の歸りなんだい。」

「鎌倉だよ。」

「鎌倉？」

「さう。酒井さんの別荘。」

「あ！　ぢやアあの瞳さんが行つてたとこなんだね。」

「さうなんだよ。だけどあんた、どうして瞳さんを知つてんのさ。」

「どうしても何もないや。いくらおれが貧弱だつて、瞳さんを知らなきやもぐりぢやないか。」

「割方話せるんだね。」

「甘く見ツこなしさ。憚りながらこれでも抽者は、瞳さんとは、少しばかり因縁があるんだぜ。」

「おや！」

「さうなんだよ。あの人が死ぬ程可愛がつてる、坂本虎行ツてのは、おれの學校の後輩なんだからね。」

「なアんだ。そんなことなの。」

「そんなことだなんていふが、これがなかなか大事件なんだぜ。坂本の妹の登美子つてのは、この夏大原の海水浴で、おれの友達の野崎が、手に入れちやつてるしさ。」

「半ちやんと關係があるといふことなら別だけど、あんたの友達と虎行さんの妹さんとがどうしたつて、そんなこと、ちつとも問題ぢやないわ。」

「問題だよ。そのためにおれ、手紙を屆けてやつて、十圓貰つたんだからね。」

「ふざけちやいけない。」

玉枝は愉快さうに、聲を立てて笑つた。

九

定食の他に、カレー・ライス一皿を平げて、腹が一杯になると、その上どこかで、カクテールの一つも、飲みたいやうなことを云つてゐる半ちやんを、漸くの思ひで撒いた玉枝は、獨り銀座の裏通りを、相當急ぎ足で歩いてゐた。

メリケン。タンゴ。イット。處女の家。オイデ〳〵――と、彼女の頭には、日頃ゆきつけのバーやカフェーが、それからそれへと色々に浮んだ。が、さてたつた獨りだとなると、流石にどこへ這入つていいのか、一寸判斷に苦しまない譯には行かなかつた。

「あゝさうだ。久し振りで、マダム・キクの店へ寄つて見よう。」

サーカスの踊り子として、十七の年にアメリカへ渡つたのが緣になつて、丁度十年間、向ふで踊り暮らしてゐたといふ、ちよいと、銀座あたりのバーの主人には、珍らしい經歷を持つたマダム・キク――その小じんまりした店が、今玉枝の眼の先に浮んだのだつた。

警視廳令に依つて、色電燈を禁じられるまでは、部屋中を臙脂の天鵞絨で張り詰めた中に、灰色の照明が取附けてあつたので、如何にも異國風の匂ひが室内に溢れて、冬などはあの煉瓦を積重ねたストーヴの前に、腰をおろしてゐると、どうやら日本にゐるとは思へないやうな、一種の雰圍氣が感ぜられるのだつた。玉枝は、そこに不思議な執着を持つてゐた。

「あらまア内田さん、お珍らしいぢやありませんか。」

颯と舞臺へ出るやうな恰好で、ドアを排して這入つて來た玉枝を見ると、折からスタンドの中で、カクテールを調合してゐたマダム・キクは、大きな表情でかう云ひながら、懷かしさうに彼女を迎へた。

「お一人？」

「えゝ。」

「どうした風の吹き廻しなんでせう。あたしの店へ、お一人でなんて。――」

「今夜は西南の風晴れよ。ほゝほゝ。あたしだつて、生れた時は一人ですものねえ。」

まだ客は、三組ばかりしか見えなかつたが、あいにく、いつも好んで掛ける場所が塞がつてゐたので、玉枝は隅の壁際に腰をおろした。

「とてもシャンだね。」

「一體何んだらう。」

「お嬢さんぢやあるまい。」

「ステッキ・ガールか。」

「失禮なことをいふと、叱られるぞ。」

背夜のテーブルにゐた會社員らしい二人連れの客は、玉枝を見ると、わざと聞えよがしに、こんな品定めを仕合つたりした。その他のテーブルに陣取つた客が、各自一齊に勝手な品評をしたのは、いふまでもなかつた。

接吻市場

「マダム。あたしにカクテール頂戴よ。」

「何んにしませう。マンハッタン？」

「まアいやだ。そんな子供扱ひにしないでよ。あたし、ジン。――」
「ジン！」
「さうよ。今夜はちよいと、捲添へを食ふところを逃れたんで、お祝ひに醉つて見たいのよ。」
「駄目よ。そんなこと云つて、誰かと喧嘩でもして來たんでせう？　ちよいとやけンなつてるらしいから。……」
「やけンなる筋はないわ。――　あたしとてもはしやぎたいのよ。」
「ぢやア一杯だけね。」
「いゝわ。兎に角ジンを頂戴。」
「よいしよ。こりやアお孃さん話せる」と、アル中らしい、舌のもつれた五十男が、いきなりテーブルを叩いた。
「ふん、お世話さま。」
玉枝は鼻の先で苦笑しながら、徐ろに煙草を取出した。――　去年の暮、まだ大洋映畫で働いてゐた時分、お互に好きだつた、二枚目の瀧澤といふ男と、ふとしたことから喧嘩をして、こゝでさん〴〵醉つ拂つた揚句に、別れたことなどが、夢の様に頭に浮んだりした。

十

ジンと、煙草との、むせるやうな壓迫を感じながら、それでも玉枝は、三杯目のグラスを唇に當てゐた。
飲まなければならない原因、そんなものは、毛筋ほどもある譯ではなかつた。醉つて、醉つて、何もかも判らなくなりたい程に、彼女にはヤケな氣持があるのではなかつた。たゞ不思議に玉枝は醉ひたかつた。
ダンス・ホールの客として、踊る相手とすれば、俊太郎は上の部に違ひない。男前だつて萬更ではなし、第一金遣ひが相當荒い。一度踊つて、三枚づつのチッケットをくれる客よりも、歸りに十圓札一枚を、そつと握らせてくれる客の方が、問題なくいゝにはいゝ。が、それかと云つて、玉枝は別に俊太郎でなければならない程、彼に打込んでゐる譯ではなかつたのだ。半ば以上の職業意識で、誰にも許すものなら、プロよりブルの方が、都合がいゝといふくらゐなものだつた。

接吻市場

だから、今夜酒井家に、降つて涌いたあの事件が出來たからと云つて、芯から思つてゐる男が、犬に靴の先を踏まれた程にも、玉枝には影響はない譯なのだが、さて聚樂莊の周圍の風光と、思はず食べ過ごした林檎の味とに、今更ながら疲れが出て、三杯のジン・カクテールは、聊か強きに失したらしい。

彼女の腦裡には、無數の銀線が入亂れて、ともすればその邊にゐる女給の顏が、悉く印象派の繪のやうに眼に映つたりした。

「マダム。そんなところに納まつてないで、出て來たらどう？」

「駄目ですねえ。とう〳〵そんなに醉つちやつて。――」

「あたし、醉つてなんか、ゐやアしないわよ。たかが二杯や三杯のお酒で、醉つてたまるもんですか。いゝからこゝへ來て頂戴よ。」

マダム・キクは、流石にアメリカ育ちだけに、三十五といふその年よりも、五六歲は若く見えた。殊に肉附のいゝ左の頰に、母指大に窪む笑靨は、ひどく子供じみた愛嬌を見せて、誰が眼にも、十年餘りの、荒んだ生活をして來た人だとは思はれなかつた。

「さア、來ましてよ。」

他の店ではちよいと見られない贅澤なソファーに、どつしり腰をおろしたマダム・キクは、玉枝の方へ身を擦寄せると、妙に色つぽく上氣した玉枝の顏を覗き込んだ。

「マダム！」

「え？」

「何か面白いことない？」

「面白いことつて、どんなことがお望み？」

「あたしに、いゝパトロンを世話してよ。」

「まア、あんなこと云つて。あなたなんか、その方なら、箒で掃くほどあるぢやありませんか。」

「買ひ被つちや困るわ。とても不自由してんのよ。だから、ほんたうに誰か、いゝ人ない？」

「あたしぢや如何？」

「冗談ぢやないの。眞劍よ。」

「ほんと」と、マダムは輕く眼を見張つて、「かつぐんでせう？」

「擔ぐなんて、そんな失禮なことしないわ。」

「もしもそれが本當なら」と、マダムは急に聲をひそめて、「あなた、年寄の方はお嫌ひ？」

「結構だわ。親切で。」

「そんならいゝ人がありますわ。」

「おいくつぐらゐ？」

「五十四五。あなたも御存じでせう、あの文化土地株式會社ツて。あすこの社長の酒井德兵衞さんて方が、お金はどんなにでも出すからつて條件で、あなたのやうな方を、探してるんですけどねえ。」

「まア！」

玉枝は、あまりのことに返す言葉がなかつた。いまがいま、その子の俊太郎と、歡樂の夢を追つて、しかもその父が、檢事局からの令狀を突き附けられてゐる現狀まで、まざ〳〵と見て歸つて來たばかりの彼女に取つては、餘りにすべてが皮肉だつた。

「どうなすつたの？」

「もう一杯ジンを頂戴。」

十一

玉枝が、更にもう一杯のジン・カクテールを要求した時だつた。正面のドアから、足音も怪しく、折れるやうになつて這入つて來たのは、思ひも掛けない俊太郎だつた。

「あツ！——」

驚きの聲は、マダム・キクと玉枝の唇とから、殆んど同時に發せられた。が、俊太郎は、それにはまつたく氣附かぬのであらう。這入ると直ぐ近くのテーブルに、崩れるやうに腰を落してしまつたのだつた。

「マダム、あの人には、あたしのこと內所よ。」

「御存じ？」

「何んでもいゝから、絕對秘密にして。」

幸ひ、青木の鉢に遮られて、俊太郎の方からは、玉枝の存在は明らでなかつた。

「今時分、俊さんどうなすツたんだらう？」

不審さうに呟きながら、彼のテーブルの方へ急いでゆくマダムの後ろ姿を、玉枝は小さくなつて見守つてゐた。

マダムは俊太郎の側へ行くと、うづくまるやうになつてゐる彼の背へ、輕く手を置いた。

「俊さん。どこで飲んでらしつたのよ。こんなに醉つて。——」

「どこだつて、いゝぢやねえか」と、俊太郎の口調は荒かつた。

「そりやアどこだつて、いゝにやいゝでせうけど、あんまりお飲みンなつちや、毒ですわ。」

「ふん、今夜はイヤに親切だね。だがそんな親切は、およそ意味なしだぜ。その口で、何を持つてまゐりませうぐらゐ、聞いたつていゝぢやねえか。——マダム。僕は今夜、酒井家の浮沈を背負つて、東京へ出掛けて來たんだからな。戰鬪力を養ふために、飲んで〳〵飲み盡す氣なんだ。」

「まア？　酒井家の浮沈を背負つて來たなんて、おどかしちやいやですね。第一、もしもそれが本當なら、なほさらお體を大切になさらなけりや、いけないぢやありませんか。」

「身體なんか、身體なんか、第二第三だよ。」

「そんなことありませんわ。何をなさるにしても、お身體が第一ですわ。――ね、ですから今夜は、悪いことは申上げませんから、醉ひ醒ましに、ソーダ水でも召しあがつて、お歸ンなさいまし。」

「馬鹿。ソーダ水なんか飲めるかい。おい、君子、ジョニオーカーを持つて來い。」

「あ、そんなに立つたりしちや駄目ですよ。」

「いゝよ。いゝから持つて來い。――さ、金は先拂ひだ。」

さう云ひながら俊太郎は、揉み苦茶になつた十圓紙幣を二三枚、ポケットから摑み出して、マダムの鼻の先へ突附けた。

「俊さん。」

「何んだ。」

「あなたお父様が、どんなに御心配なすつてらツしやるか、知れませんよ。」

「御父が心配してる？　知りもしねえで、いゝ加減なことは云はないでくれ。親父のことを、僕が、こんなに心配してるんぢやねえか。」

「何云つてらツしやるのよ。お父様にお目に掛れば、いつでもお話は、あなたのことばかりぢやありませんか。――今夜だつてきつと鎌倉のお屋敷で。……」

「マダム！　生憎親父は、もう家にやゐないんだ。」

「お屋敷にゐない？　嘘をおつしやい。今朝もあたしに、お電話を下すつてますよ。」

「今朝と今とでは、時間が違ふぜ。大方あしたなさの新聞にや、寫眞入りで出るだらうが、親父はついま今し方、鎌倉から、檢事局へ引張られたばかりなんだ。」

「檢事局へ！」

「驚いたらう。だからさつきから云つてるぢやないか。僕は今夜、酒井家の浮沈を背負つて來たんだつて。――」

「まア！　どうしませう？」

「大將、落着が肝腎だぜ。度胸定めに、ゆつくり飲むがいゝや。なア姐さん。あツはツは。――」

黙つて、チビリ〳〵と飲んでゐた肥大漢が、かう云つて笑つた。

十二

酒井家の浮沈を背負つて出て來たといふ、俊太郎の樣子には、確に冗談や狂言ではない眞劍さがあつた。皺苦茶の十圓紙幣を叩き附けて、女給の手から受取つたジョニオーカーを、ぐいと一息に飲み干した彼には、唯やけと面白づくとでは出來ない、何か強い力が溢れてゐた。

マダム・キクにして見れば、降つて湧いたやうな、德兵衞の拘引は、餘りに突然の出來事だつた。ア

メリカ歸りといふ一つの看板が徳兵衛の意に叶つて、こゝへ店を出すと間もない時分から、ずツと引續き贔屓になつてゐた大事の華客だけに（時には龜屋の拂ひに、五百圓の小切手を書かせたこともあるくらゐだから）正に人事とは考へられなかつたに相違ない。

「俊さん。」

「何んだい。忠告ならもう澤山だぜ。」

「忠告ぢやありません。だけどあなたは、これから先の目的を、ちやアんと考へてらつしやるんでせうね。」

「目的？」

「さうですわ。どういふ風にして、お父親を救つて、この急場を完全に切り脱けようかといふ。……」

「そんなことは云はれるまでもないよ。僕には僕の、スポーツマンとしての覺悟があるんだ。これから伯父のところへ行けば。……」

「伯父様のとこ？」

「しッ！　あんまり大きな聲をしてくれんなよ。秘密ぢやねえか。」

「自信がお有り？」

「自信以上のものがあるんだ。——だから、もう一杯ウヰスキーを持つて來てくれ。」

「いゝえもういけません。この上召上つたら。……」

「どうなるといふんだ。」

「どうツて肝腎の目的が、達せられなくなるぢやありませんか。」

「馬鹿云へ。おれは、おれはそんなだらしのない人間ぢやねえぞ。」

と、この時、邊りを憚るやうにして、ドアを排して這入つて來た二人があつた。

「いけねえ。酒井がゐる。」

「酒井ツて？」

二人は小聲で囁き合つたが、それでも別に、出て行かうといふ樣子もなく、入口に近いテーブルに腰をおろした。

「あいつに見られると、うるさいんだ。」

「この間の一件？」

「うむ。」

それはベイちやんと、カルメンの龍子だつた。

が、醉ひしれてゐる俊太郎の眼だけは、避けることが出來たが、他の客の注視は容易に避けることが出來なかつた。殊に飛び放れたシークボーイと、モダンガールの裝ひをした二人であるだけに、尙更だ

つた。

云ひ合せたやうに、一同の視線は、二人の上に集まつた。

「おや！　素晴らしいのが來たぢやないか。」

「女優だな。」

「レヴューのか。」

「も少し高級かも知れねえぞ。」

「いゝなア。」

「羨ましがるなよ。」

「だつて、とてもシャンぢやねえか。」

「淺草へ行つて見な。ざらにゐるから。……」

その二人が、玉枝の眼に映じない譯はなかつた。玉枝は二人を見ると、思はず立ち上つて呼びかけやうとした。が、それよりも速く、曾て同じダンス・ホールにゐたことのあるカルメンが、彼女を發見してゐた。

「玉枝ちやんね。」

玉枝があわてて手を振る間もなく、カルメンの聲は、俊太郎の耳に這入つてゐた。

「玉枝？」

ぎよつとしたやうに、彼は立上つて、邊りを見廻した。

十三

「あツ！」

「野郎！」

邊りを見廻した俊太郎は、まつたくそこに、思ひも掛けなかつか三人を發見したのであつたが、それと同時に、彼は恰も狂犬のやうに夢中になつて、玉枝のテーブルに飛んで行つた。

「一體、どうしたんだ。」

「あら、困るわあたし。そんな怖い顏をされちやアー。」

「何を云つてやがるんだ。貴樣、よくもおれを裏切つたな。」

「まアいやだ。裏切つたなんて、どうしてよ。あんたこそ、あたしを裏切つたぢやないの。」

「おれがいつ裏切つた？」

「あたしが、刑事につかまつた時、あんなに呼んだのに、助けにも來てくれないで。……」

「刑事につかまつた？」

「さうよ。お宅の自動車で、おもてに待つてた刑事に、つれて來られたんぢやないの。」
「刑事につれてこられた者が、何んでこんな所にゐるんだ。」
「だからさ。あたし新橋を渡つたところで、急にお腹が痛いと云つて、自動車ぐるみ、撒いちやつたから、よかつたんだけどさ。——ちつとはあたしの氣持だつて、察して下すツてもいゝんだわ。」
「そんならさうと、早く云やアいゝぢやないか。おれはまた、あれからどんなに搜したか知れやしねえ。」
「早くいふも何もないわ。いきなりあたしが這入つて來ると、怖い顏して怒鳴るんですもの。」
「さうだ。そのお孃さんに無理はないぞ。」
「あんまりいぢめるな。」
玉枝の頰に涙が傳はると、隅の方からかうした彌次が飛んだ。
「ぢやまアいゝから、もうどこへも行つちや駄目だぜ。」
「行けツたつて、行きやアしないわ。折角あんたを搜し當てたんですもの。——」
すると俊太郎の眼は、直ぐにベイちやんのテーブルに移つた。
「おい！　貴樣この間は、よくもおれに耻を搔かせたな。」
「どなたでしたツけ？」

グレープ デュース・ソーダのストローを銜へてゐたベイちやんは、まつたく馬鹿にしたやうな調子で、丁嚀に頭を下げた。
「白ばツくれるな。おれは酒井俊太郎だ。」
「あゝ、酒井さんでしたか。いや先日はどうも失禮しました。」
「貴樣、あやまれば濟むと思つてるのか。」
「あやまればツて、何も別に、あやまる程のことをした覺えはありませんね。」
「あんなことまでして、あやまる覺えはないといふんだな。」
「まアさうですよ。昔から、喧嘩兩成敗といふからね。それにあの時は、女と病人しかゐないところへ、そんな大きな男が、一人で喧嘩を賣りに來たんだから、あのくらゐなことは當り前ぢやないか。」
「よし。きつとあのくらゐなことは、當り前なんだな。」
「まづね。」
「これでもか。」
俊太郎はいきなり、そこに在つた灰皿を取り上げると、ベイちやんとカルメン目掛けて、叩き附けた。
灰皿はテーブルの角に當つて、微塵に碎けた。
「何をしやがるんだい。」

立上つたのは、ベイちやんではなくて、カルメンの龍子だつた。
「何んだと。」
「馬鹿野郎。自分の間抜を棚へ上げて、飛んだ逆怨みをするなんて、ちつたア耻を知るがいゝや。」
「貴様なんか、女のくせに默つてろ。」
「默つてゐやうがゐまいが、お前のやうな唐變本の指圖は受けないよ。」
「こいつ！」
俊太郎は猛然として突進した。

十四

「いけない！　そんな亂暴をしちやいけません。」
俊太郎の體を、後から抱き止めたのは、マダム・キクだつた。
「放してくれ。こいつらは、おれの敵なんだ。」
「いけません。あなたはこれからまだ大切なお仕事がある身體ぢやありませんか。」
「餘計なことを言ふな。――やい、貴様達、後悔するな。」
「後悔も夜會もあるかい。てめへのやうな萍綠玉を、相手にするなア大人氣ねえと思つて、下から出り

や附上りやがつて、やれるもんならやつてみろ。そんな面構へに驚くやうなベイちやんぢやねえんだ。」
「畜生！」
「おかみさん。放してやつてよ。そんな人、どう暴れたつて、決して迷惑は掛けやしないから。……」
カルメンはさう云ひながら、コンパクトを取出して、鼻の頭をかるく叩き始めた。
「マダム！　放せ！」
「いけません。あたしは、どんなことがあつても、決してこゝは放しません。」
俊太郎は、しきりに身を悶えたが、先刻からかなり酒が廻つてゐる上に、懸命に押へるマダムの力が強いので、一歩も前へ出ることが出來なかつた。
「おい、しつかりしろよ。口ばツかりぢや面白くねえぞ。」
「本當だ。ひとつ世直しに、大格闘を見せろよ。」
「お望みとあれば手傳うぜ。」
あちこちのテーブルから、面白づくの彌次が、盛んに飛んだ。
「お客様。申譯ありませんが、酒井さんは、この通り醉つておいでですから、どうかそのまゝお引取り下さいませんか。」
この上は、相手のベイちやん達を歸すより外に、道がないと思つたのであらう。マダムは俊太郎を押

へたまゝ二人の方に向つて、かう云つて頭を下げた。
「だつて、その男が、そんなに頑張つてるぢやないか。おれ達を、叩きのめすといふんだから、叩きのめされてからでないと、歸つちや悪からうと思つてるんだ。」
「さうだ」と、俊太郎が叫んだ。「逃げずに待つてろ。いま直ぐに、望み通りにしてやるから。……」
「馬鹿。てめえの頭の蠅でも追つてろ。また玉枝に逃げられたぢやねえか。」
ベイちやんは苦笑しながら、俊太郎のうしろのテーブルを指した。そこには、いつの間に影を消したものか、玉枝の姿は見られなかつた。
「ど、どこへやりやアがつた。さうだ。貴様達が逃がしやがつたんだな。」
「冗談いふない。そんな暇はねえや。」
そこまで來ると、もう女の方ではどうすることも出來なかつた。マダムが折れるまではと、耐へてゐた手を放すと、俊太郎は、ボールのやうにベイちやんのテーブルへ飛び附いた。
「けだもの！」
「野郎！」
「誰か、速く來て！」
マダムの聲と同時に、奥から駈け出して來たコックの中島は、鐵のやうな太い腕で、俊太郎の手を摑

んだ。
「酒井さん。つまらないことをするなあお止しなさい。」
「いゝから放してくれ。おれはこいつに、用があるんだ。」
「用があるんなら、靜かに話しや判るぢやアりませんか。マダムがこんなに心配してるんです。それにあんたも、怪我をしちアつまらねえ。お止しなさい。」
俊太郎は、默つたまゝ足を擧げてテーブルを蹴つた。と、この時帳場の側の電話のベルが、けたゝましく鳴り出した。
「——はいはい。左樣です。え？　玉枝さんと仰しやるんですか。はい、酒井さん。いらつしやいます。何んと申し上げるんです？　これで左樣なら、あなたの紙入は、あたしが頂戴しました。それだけですね。かしこまりました。」
女給は怖々俊太郎の側へ行くと、ありのまゝを俊太郎に傳へた。

秋草

一

殘暑の烈しさをかこつ言葉が、往き來の人の挨拶代りに交されたのも束の間、日毎に空の藍色が深まるにつれて、瞳と虎行との隱れ家の、三坪に滿たぬ庭にも、可憐な秋草が咲き誇るやうになつた。

そこは東京の南郊、東武鐵道の曳舟驛で下車して十分餘り、その昔は瓦燒く家が多かつたといふ、小梅の里に近い、こんもりした樹蔭に包まれた一軒家であつた。はじめ瞳は、虎行と共に鎌倉を去つて東京へ歸ると、二人の愛の巢を築く場所に、かなり迷つた。中央線の沿線、京濱間、小田急の沿線と、今までに知つてゐる限りの土地が、あちこちと頭の中に浮んだが、人目に附き易い場所や、繁華な街に近い所は、氣が進まなかつた。

それはひとつには、土地横領の詐欺事件と、會社乘取の陰謀とが暴露した酒井德兵衞が、親戚に當る大官新關進之丞に累を及ぼす事を惧れて、一夜、保釋中の身を、自邸の一室に、俄然ピストル自殺を遂げた結果、これまでのブルジョア生活から、一朝にして一貧サラリーマンに成り下つた俊太郎の、狂氣の如き眼を遁れる爲めであつた。

で、瞳は虎行と相談して探し廻つた末、けふまで夢にも考へなかつた今の家に、落着いたのであつたが、さて、一旦落着いて見ると、思つたほど周圍は不便でも、不愉快でもなかつた。曳舟驛まで出る間の町並には、少し心に染まない所もあつたが、電車に乘つてしまへば、瞬く間に淺草驛に着いたし、業平橋まで歩けば、雷門行のバスも、目と鼻の先だつた。それに小田急や中央線の沿線のやうに、サラリーマンが目立たない代り、山の手では見られない、附近の工場へ通ふ職工達の、虛飾のない姿が、朝夕窓越しに、樹の間を通して眺められた。

清々しい銀の矢のやうな陽が薄れて、そよ〳〵と肌に沁みる夕暮の風が訪れる頃、瞳はよく虎行と連れ立つて、隅田公園を散歩したり、百花園を逍遙したり、時には白鬚橋の上に立つて、綾瀨の水に映える夕陽に、長い間見入ることもあつた。そんな時、瞳は思つたよりも順調に回復してゆく虎行の健康にひそかに喜びの眼を瞠ることが多かつた。

虎行は氣が向くと、よく瞳をモデル臺に立たせて、カンバスに向つた。瞳は虎行が疲れるまで、一時間でも二時間でも、同じ裸體のポーズのまゝ、動かうともしなかつた。そして彼女は心の中で、虎行の實力が、一時も速く發揮される日の來ることを、ひそかに祈つてゐた。

「――自分の身はどうなつてもいゝが、虎行さんだけは、どんなことがあつても、ほんたうの畫家にさせたい。それがあたしの責任でもあり、懺悔でもあるのだ。――」

さういふ叫びが、おのづから瞳の心に湧いて來るとき、彼女の胸には、自分自身の美しさもなければ醜さもなく、只管虎行の成功のみを希ふ外に、何もなかつた。

「でも、あたしは幸福だ。誰が何んと云つても、幸福に違ひない。」

彼女の、みづからの肌を凝視してゐる眼の裡は、いつも熱くなつてゐるのだつた。

毎日、平和と愉悦の時が續いて行つた。が、瞳は間もなく、所持の金が、殘り少くなつてゐるのを考へなければならなかつた。鎌倉で酒井德兵衛から絞り取つた金は、虎行の病氣と、必要な日用品の購買等のために、もう大抵遣ひ盡して、今はこれといふ、金の出所も持たない彼女だつた。色々思案の結果、兎も角おゑんに少し都合をさせようと考へて、現在の住所を知らせ旁々手紙を出したのは、一昨夜のことだつた。

けふは朝から、新らしく張替へた障子に映る陽を浴びながら、瞳は虎行と、描きかけの自分の像に就て、樣々の批評をし合つてゐたが、丁度その時「瞳さんのお宅はこちら？」といふ、明るい聲を耳にしたのだつた。

二

「誰だらう？」

「きつとおゑんちやんよ。」

格子先の聲を聞いた瞳は、虎行の顏を見て、ちらと微笑すると、默つて玄關の方へ出て行つた。

「どなた？」

「あ、やつぱりさうだつた。」

今度は明るい、いつものおゑんの聲が、はつきり虎行の耳に響いた。

「隨分探しちやつたわよ。いくら何んでも、こんなとことは想はなかつたんですもの。」

「さう。——でもちやんと、地圖に書いてあげたぢやないの。」

「地圖ッたつて、あれ、まるで地圖になつちやゐないわ。それに、煙草屋の角を右へ曲るつてあつたけど、いくら探しても、煙草屋なんかありやしないんですもの。」

「あら、さうかしら。……あ、ごめん〳〵。間違ひた。煙草屋ぢやなくつて、乾物屋だつたわ。」

「乾物屋？　ひどいや。乾物屋と煙草屋とを間違へるなんて。……」

接吻市場

そのまゝ座敷へ這入つて來たおゑんは、緣側から、秋草の咲き亂れた小庭などを見廻してゐたが、日本間に絨氈を敷いた部屋の籐椅子に、靜かに恁れてゐる虎行を見ると、あわてて輕く頭を下げた。

「虎行さん、こんちは。」

「やア失敬。」

虎行は元氣に振返つた。
「大變血色がよくなつたわね。」
「まいンち、日光浴をしてるんだもの。」
おゐんはあらためて、虎行の顏色を見直したが、今度は瞳に言葉を移した。
「瞳さん安心したでせう。」
「えゝ。もう大丈夫よ。それにこの頃、あたしをモデルにして、毎日とても勉强するんですもの。——この繪どう？」
「あら、素敵ね。それに裸體ね。」
「ポーズ、をかしい？」
「をかしいどころぢやないわ。でも虎行さん、とても腕が上つたのね。」
「別に上りやしないよ。たゞ何んとかして、來年の春までにや、これと同じポーズで描き上げて、展覽會へ出したいと思つてるんだが。……」
「これなら大丈夫。パスすると思ふわ。眞實にそつくりですもの。」
「そつくりだけなら、寫眞の方がそつくりぢやないか。」
「あら、そんな皮肉は言はないの。」

「皮肉ぢやないよ。僕、顏を似させることなんて、ちつとも苦勞しやしないんだもの。」
「でも、苦勞しなくて、それだけ似れば大したもんだわ。」
「まアいゝや。それでも賞めてくれるうちなんだから。……」
「瞳さん。あんたのお仕込がいゝから、虎行さんとても、口が惡くなつたぢやないの。」
「おゐんちやんの賞め方が惡いからよ。」
「あれだ。賞めたり、叱られたりしちや叶はない。——でもまアそれだけの元氣なら安心だわ。おとゝひの手紙を見るまでは、一體どうしたんだらうツて、隨分みんなで心配したんだもの。ベイちやんなんか、瞳さんと虎ちやんとは、上海へでも行つちやつたんだらうなんて云つて。……」
「まさか、まだ上海へ遁げる程、惡いことはしないもの。まアそれより、遠いとこをわざ〳〵來てくれたのに、お茶ぐらゐ出さなくちや濟まないわ。いま入れるわよ。」
「いゝのよ。そんな心配しないでさ。だけど鎌倉にゐた時の婆やどうしたの？」
「もうゐないわ。」
「ぢやア毎日の御飯はどうしてるの？」
「みんなあたしが拵へてる。」
「まア、とても感心なのね。」

「どうして？」
「あんたにそんな、世帶染た眞似が出來るなんて。……」
「當り前ぢやないの。これでもあたし女よ。」

三

そのまゝ勝手元へ去つた瞳は、しばらく瓦斯臺のまはりで、何か音を立ててゐたが、やがて三つの紅茶茶碗を、大きな銀盆へ載せて現はれた。
「おゐんちやん。あんたこのお盆見覺えがあるでせう？」
「どこンでしたつけ？」
「聚樂莊の、鏡の部屋で使つてた、あれよ。」
「あゝあれ？　だけどどうして持つて來たの？」
「ベイちやんの手品よ。しかも二枚、水着のトランクへ入れて來ちやつたの。——」
「あの人、相變らず達者ねえ。」
「おかげで、この家に似合はない道具がある譯なの。——そのつもりで、一杯お上ンなさいよ。」
「戴くわ。」

「あんたの、ミルク多くしといてよ」と、瞳はその一つを取つて、虎行の方へ廻した。
「ほんたうに羨ましいわねえ。あたしも誰かいゝ人ないかしら？」
「捜せばいゝぢやないの」と、瞳は微笑した。
「でゝ村はどう？」
「まツ平よ、あんな甘ちやん。」
「ぢやいつそ、明石町の、あの張がいゝわ。あれならおゐんちやんだつて、まん更嫌ひでもなかつたんだから。……」
「でもあたしやツぱり、まるごとの日本人でなきや、外聞が悪いもの。それに、こつちばかりいくら好きだつて、向ふがその氣ンなつてくれなけりやね。そこへ行くと瞳さんは幸福だわ。ほんたうに。——」
おゐんの言葉に、多少の誇張はあるとは思ひながら、それでも瞳は沁々悅ばしさを覺えずにはゐられなかつた。
この時、虎行が突然立上りながら、呟くやうに瞳の方を振り返つた。

接吻市場

「弱つたなア、けふは。」
「弱ツたつて、何うしたの？」
瞳は唇に當てた紅茶茶碗を、直ぐテーブルの上へ置いて訊ねた。

「繪の具が少し足りなくなつちやツたんだよ。このブリューが。……」
「けふいるの？」
「あゝブリューがないと、髪の毛を描くことが出來ないからねえ。」
「そんなら、これから買つて來てあげるわ。」
「行くのは、僕が行くからいゝけど。……」
「だつて、こゝから神田までは大變よ。それに今日はあとで、お醫者さんへ行く日ぢやない？　あたしおゐんちやんと、遊びながら買つて來てあげるわ。」
さう云ひながら、瞳はおゐんに目配せした。外へ出てから、手紙の返事を聞かうとの合圖であつた。
「ぢやア濟まないけど。……」
「ちつとも濟まなかないわ。おゐんちやん、二時間ばかり、あたしにつき合つてくれる？」
「つき合ひますとも。どうせ遊んでるあたしよ。」
「でも、誰かと、お約束があるといけないからさ。」
「そんなんなら氣が利いてるんだけれど、近頃不景氣で、散歩に誘つてくれる人だつてありやアしないわ。いつそのこと、新聞の求緣欄へ、相當紳士の御援助願ひ度しツて、局留廣告でも出さうかと思つてるんだわ。」

「それもいゝかも知れない。あつかましいのから、お目に掛りたいつて、手紙が來ないとも限らないからねえ。」
そんな冗談を云ひながら、瞳は洋服を着替へるために、次の部屋へ這入つて行つた。
「虎行さん、一人で待つてられて？」
「當り前さ。」
「だつて寂しいでせう？」
「子供ぢやないよ。」
「どうだか。」
「僕はお醫者へ行つた歸りに、獨りで隅田公園を歩いて來るのが、とても好きなんだ。」
「大丈夫？　この邊、ヘンな女が多いつていふから、誘惑されちや駄目よ。」
「馬鹿にしちやいけない。」
虎行は思はず苦笑した。
「どうもお待遠さま。」
瞳の服裝は、黑い佛蘭西縮緬のワンピースだつた。

四

戸外は秋の淸々しい陽が滿ちて、眼のゆく限り、空が蒼く澄んでゐた。肩をならべて行く二人の上を、いくつもの赤蜻蛉が、矢のやうに過ぎて行つた。

「あのね。」

「何？」

家を出て一丁ばかり行つたところで、ちよいと改まつたやうに、おゐんは瞳を振り返つた。

「さつき、云ひ出しそびれちやツたんだけど、手紙の一件ね。あたし濟まないけれど、あれだけ出來ないのよ。」

「いゝわ、いくらでも。」

「これで勘忍してくれる？」

おゐんは、何か秘密書類でも出すやうに、帶の間から、封筒を取出して、素速く瞳に渡した。

「本當云へば、今更おゐんちやんに、お金の心配なんかさせる譯ぢやないんだけどね。少しばかり豫算違ひをしてたもんだから。」

「豫算違ひだなんて、どつかの內閣みたいなことを云つてるわ。ほゝゝゝ。」

瞳は封筒を切つて、三枚の十圓紙幣を引出すと、直ぐにそれをハンド・バッグに入れた。

「これだけでも助かるわ。でもこんな時、あのダーモンが生きててくれると、とても都合がよかつたんだけどねえ。」

「蟲がよすぎるわ。こんな時ばかり思ひ出すなんて。——今頃地獄で赤鬼や靑鬼と、くしやみをしてゐるかも知れない。たまにや、お寺詣りくらゐしておやんなさいよ。」

「お寺まゐりだなんて、まさかアメリカまで、お寺まゐりにも行かれないぢやないの。」

「あ、さうだ。あの人のお墓はアメリカね。」

「しつかりしてさ。毛唐人と日本人との見界だけは附けといてよ。」

「あはゝゝゝ。あたしうつかりしちやつた。」

「うつかりし過ぎるわ。——それアさうと、あんたけふはもう、ほんたうに用はないの？」

「用なしよ。すればどつかへ行つて、も少し都合して來ようかと思つてるくらゐだけど。……」

「いゝわ、これだけで。」

接吻市場

「四五日たてば、もうそのくらゐは持つて來るわよ。」

「心配しなくつても大丈夫。」

「當はあるの？」

「その氣で捜せばあるだらうと思ふの。何しろ、病院この方、まるで虎行さん以外には、考へた事がないんですものねえ。そ云つちやをかしいけれど、あたしに取つて虎行さんは、隊商のオアシスと同じなんだから、あの人の病氣は、自分の病氣よりも辛いのよ。だもんだから、つい、ふところが手薄になつたことも忘れちやつて、急に繪の具を買ふにも不自由するなんて、醜態を演じちやつたの。だけど、もうあの人の體も大丈夫だしするから、これからまた、しつかり働くわ、腕に撚をかけて。……」

「それがいゝわ。お金のことで、虎行さんに心配させちや、それこそあんた濟まないことよ。」

「安心してよ。あたしにも、色々計劃はあるんだから。……」

「あゝ、それからね。瞳さんに云つとくことがあるのよ。あの酒井俊太郎ね。」

「どうかした?」

「瞳に復讐するんだつて、この頃氣狂のやうになつて、あんたの行方を尋ねてるさうよ。」

「復讐されることなんて、ちつともないぢやないの。」

「だけと、あの德兵衞爺さんが自殺したのは、あんたのおかげだと云つてるんだつて。……」

「冗談云つちや困るわ。あたしまさか、あの親爺を殺すほど、惡ぢやないわ。馬鹿に遭つちや叶はないね。」

「でも、用心だけはした方がいゝわ。怪我でもさせられちや馬鹿々々しいから。……」

「あんな奴が怖くつちや、東京に住んぢやゐられない。」

瞳は明るい氣持で笑つた。

二人はいつか、曳舟驛の前まで來てゐた。

五

電車で曳船から淺草驛へ出た二人は、驛前でタクシーを拾ふと、そのまゝ神田へ出て、まづ虎行に註文された繪の具を買つた。そして三省堂の食堂で、紅茶に咽をうるほしてから、再び淺草へ戻ると、晝食とも夜食とも附かない食事を攝るために、支那料理屋「畫舫亭」の階段を踏んだのであつた。

時間が半端なせいであらう。二階には、でつぷり肥つた赤ら顏の背廣の男と、その連れの事務員らしい女との外は誰もゐなかつた。瞳とおゐんとは、裏の窓際に腰をおろすと、メニューを見ながら、思ひ思ひの料理を二品づつ註文した。

「とても空いてるわね。」

「こゝは少し高級だからよ。」

「さうかしら。」

「だつて絨氈が敷いてあるぢやないの。公園で絨氈の敷いてある家は、外にありやアしないもの。」

「ヘンな事を研究してるわねえ。」

「研究ぢやないけど、ちよいとためして見たのよ。」
瞳はさう云ひながら、煙草を出して喞へた。
「どうもお待たせしました。」
長方形の盆に、燒賣と汁鷄丸とを載せて上つて來た給仕は、それを丁嚀に二人の前にならべると、ペコリと一つ頭を下げて降りて行つた。と、それと殆んど同時に、先刻から頻りにこちらを見てゐた赤ら顏の男が、向ふのテーブルから聲を掛けた。
「失禮ですが、あなたは田村さんぢやありませんか。」
「はい。」
が、瞳は流石に不審の眼を見張らずにはゐられなかつた。彼女は自分の記憶を、稻妻のやうに鋭く呼び起さうとしたが、相手の顏には、何んとしても覺えがなかつた。
「誰方でございましたかしら?」
それでも、こんな場合、瞳は、人を反らさないだけの用意を、ちやんと胸に疊んでゐた。
「御記憶はありませんか。」
「はい。」
「いや、御記憶のないのが、當然かも知れません」と、相手は應揚に笑つて、「私もちよいとあなたを思

ひ遠ひしてゐたくらいですからなア。――私はかういふ者です。」
彼はポケットから一葉の名刺を取出すと、瞳の前に置いた。
――大津兵吾郎。そしてその肩に、武藏車輛株式會社々長と記してあつた。
瞳の視線は、何よりも先に、その肩書を見逃しはしなかつた。と同時に、彼女の頰には微笑がこぼれた。
「あら、左樣でございましたか。とんだ失禮申上げまして。……」
「失禮はお互ですよ。何しろあのグレイ商會へ、ダーモン君を訪ねた時、一二度お目に掛つただけですからな。」
「さうだ」と、瞳は心で頷いた。勿論直接話をしたこともなければ、名乘合つたこともない相手ではあつたが、云はれて見れば、武藏車輛の社長として、あの時分會社宛に振出した彼の小切手を、ダーモンに取次いた覺えがあるので、その名前は、瞳には、かなりはつきりした印象だつた。それは金高が七萬圓といふ、相當大きなものであつたのと、小切手に署名してあつた書體が、あまりに幼稚だつたのが、

接吻市場

一つの矛盾のやうな氣がしてゐたがためだつた。
「ダーモン君も、氣の毒なことをしましたなア。あの働き盛りで、突然あんな結果になるなんて、しかし、あんたは、引續きあすこにお勤めですか。」

「いゝえ。あたくし、あれから間もなく、お暇を頂きまして。……」
「ほう。ではこの節は？」
「遊んで居りますの。」
「遊んで？」
そこで大津兵吾郎は、更に鷹揚に笑つた。
「お暇の時に、遊びにおいでなさい。働く氣なら、どこへでもお世話しますよ。あんたの働き振りは度度ダーモン君から聞いてゐましたから。……」

六

「一體あれ誰なのよ。」
女を連れて、大津兵吾郎が出て行つてしまうと、おゐんは直ぐに瞳に訊ねた。
「これよ。」
瞳は、いま貰つたばかりの名刺を、おゐんの前に彈き出した。
「あら、あの人あれで社長さん？」
「さうよ。」

「ぢやアあの女、何かなのね。」
「いづれそんなことでせう。會社の社長なんてものは、大概自分の手の届くだけは、手を擴げて見たいのが當り前なんだから、自分のとこで使つてる事務員なんか、むろん勝手にしなけりや損だぐらゐに、思つてるに違ひないもの。」
「だつて、いまのなんか、隨分まづい顏ぢやないの。姿だけはちよいと見られるけど、額は拔け上つてたし。……」
「そんな贅澤云つちやゐないのよ。藝者をひかして、お妾にすりやア纏まつたお金がいるぢやないの。そのことを考へりや、事務員なんか、どうせよくつて三十圓なんだから、その倍手當をやつたつて、六十圓ありや御の字だもの。資本家なんて者は、十人が十人まで、みんな算盤から割出して始めるんだからねえ。」
「でも、瞳さんに、遊びに來いツて云つてたぢやないの。」
「氣があるからよ。」
「氣が？」
「さう。でなくつて、誰が遊んでるんなら、就職の世話をしてやらうなんて、親切をいふもんですか。男が、それも金持が、女に親切らしいことをいふのは、みんな色氣の下心よ。」

「あんた、行つて見る氣あるの？」
「もちよ。」
「あら。」
「だつて、天から降つて湧いたチャンスぢやないの。野球で云へばツー・ダウンで四球に出たバッターが、次のピンチ・ヒッターに、三壘打を打つて貰つたやうなものよ。だから斷然ホームへ突進する事は、當り前ぢやないの。」
「自信ある？」
「あんなのを相手にして、自信がなくつちや可哀想よ。」
「そりやアさうだけど、あたしのいふのは、あの奴さんに對する自信ぢやないのよ。虎行さんに對して、平氣かつてことなの。」
「あんたは駄目ねえ。」
「どうして？」
「どうしてつて、あんたにや、眞珠と硝子の區別判らないの？」
「そのくらゐのこと判るわよ。」
「なら、そんなこと訊くだけ野暮よ。虎行さんはあたしの眞珠だし、その外の男は、一人殘らず硝子だ

もの。」
「まア、隨分徹底してるわねえ。」
「だつてさうなんだもの。だからあたし、明日にでも出掛けてつて、簡單に征服しちやつてやらうと思つてるんだわ。」
「明日は、あんまり急ぎやない？いくらなんでも。」
「善は急げ。時は金よ。芝居の文句ぢやないけど、またもや御意の變らぬうちだもの。」
「ぢやアその前祝に、老酒、一杯飲まないこと？」
「飲んでもいゝわ。」
おゐんは直ぐにボーイを呼んで、老酒を命じた。
黃金色の老酒が、二人の前の、錫の猪口に注がれた。
「あんたの健康のために。——さうぢやないわ。あんたと虎行さんの幸福のために。——」
「おゐんちやんに、とてもいゝ人がさづかるやうに。——どう？　これは？」
「人が聞いてたら、笑はれちやうわ。」
「平氣よ。木當の事なんだもの。」
一組の客もゐないのを幸ひ、二人は勝手なことを云つて、またもう一瓶の老酒を代へた。

七

淺草まで來たのだからといふので、新カヂノ・フォリーをちよいと覗いて、吾妻橋の袂でおゑんと別れた瞳が、言問まで蒸汽に乘つて、家へ歸り着いたのは、もう夕方に近い時分だつた。

大方留守に買ひに出たのであらう。虎行は獨り籐椅子に凭れて、新刊の雜誌「モダン日本」のベーヂを繰つてゐた。

「唯今。」

「あツ！」

「びつくりして？」

「びつくりするさ。急にそんなおどかすんだもの。」

「だつて、待つてるだらうと思ふから、急いで來たのよ。」

「急いだにしちやア、處分遲いなア。」

「そんな皮肉云はないでよ。あたしこれでも、出たついでだと思つて、おゑんちやんと、方々買物して歩いてたのよ。——これ、お約束の繪の具とお土産。」

さう云ひながら瞳の取出したのは、虎行に賴まれた繪の具と、畫舫亭のしゆうまいの折だつた。

「お腹空いたでせう。」

「少し。——」

「少しなんて、痩我慢しないものよ。」

「痩我慢ぢやないよ。」

「ぢやア何んか上つたの？」

「食べやしない。だけど僕まだ、何んにも欲しくないんだ。」

「あら！　あんた怒つてるんぢやない？」

「怒つてなんかゐるもんか。そんな理由ないぢやないか。」

「でも、なんだか變だわ。」

「ちつとも變ぢやないさ。それより、瞳さん。變て云へば、人生つて、まつたく變なもんだねえ。」

「まア、何んだと思つたら、どうして急にそんなこと云ふのよ。」

「急につて、ちつとも急ぢやないんだよ。さつきつから、一人で默つて、こゝで考へてるうちに、實際、人の一生つて、考へれば考へる程不思議でならなくなつちやつたんだよ。」

「またどうしてそんなことを考へ始めたの？　だからあたし、あんたを一人で置きたくないのよ。人生とか、人間とかツて問題を、本氣ンなつて考へてたら、きりがないのぢやないの。」

「そりやアきりがないかも知れない。だけど、僕はやつぱり、考へずにやゐられないもの。例へば、瞳さんと僕とは、いまかうして樂しい生活を續けてゐるが、二十年とか三十年とか經てば、いやでもお互に、死んでしまはなけりやならないんぢあないか。」

「いやいや。そんなことを考へるのは、いやよ。」

「まアお聞きよ。何も僕が、いま直ぐ死んじまうといふ譯ぢやないんだから。……それどころか。僕はこの頃、人間生きてるうちが花だといふ、あの言葉が、まつたくその通りだと考へられて來たんだよ。だから僕は、どんな事があつても、長生をしなけりやいけないと、つくづく思つちやつたんだ。」

「そりやアさうよ。生きてればこそ、樂しみもあるんぢやないの。だからあんたも、何より體を第一にして、どんなことにも無理をしないやうにして頂戴よ。」

「生きるよ。生きなけりや、僕は濟まない樣な氣がするもの。謂つて見れば、この不思議な人生の門を、唯一歩踏み込んだばかりの僕ぢやないか。僕がこの不思議な人生で知つてるのは、ほんたうに、瞳さんの心だけなんだからねえ。」

「もつと、色んな人の心が知りたいの？」

「本當の人の心は、一生に一人だけ知つてれば、云ふことはないけど、たゞ世の中に、土に有るやうな、幾つもの層があるとしたら、僕はそれを見たいんだよ。それを深く知れば知る程、自分の力が強くなり

やしないかと思つて。——」

「まアいゝわ。健康でさへあれば、これから先どんなにだつて、好きな研究も出來るんだから、何よりも健康よ。それよか、現在の問題は、このしゆうまいを食べることだわ。」

瞳はさう云つて、勝手先へ西洋辛子を取りに立つた。

八

瞳が、寺嶋町の一角に在る、武藏車輛株式會社の、赤煉瓦の正門を潜つたのは、その翌日の午後だつた。彼女は、そこに嚴しさうに控へてゐる門衛の前に行つて、輕く頭を下げた。

「社長さんに、お目に掛りたいんですが。……」

「社長さん？」と、巡査の古手らしい門衛は、不審さうに瞳を見詰めたが、極めて横柄に訊ねた。

「用件は何だね。」

「用件なんか、あんたにいふ必要はないぢやないの。」

瞳は、門衛の態度が、不愉快でたまらなかつた。

「いや、必要があるから訊くんだよ。この會社では、社長に用のある人は、いちゝくその用件を、こゝで控へて置くことになつて居るんだからね。用件の不明な訪問者を取次いで、問題でも起したら、それ

こそこちらの首に關はることだ。取次いで貰ひたければ、まづそれを云ひたまへ。」
「冗談ぢやないわ。社長に話す用件を、いちく門番にいふ者があるもんですか。」
この時、この門を指して、滑るやうに走つて來たのは、社長大津兵吾郎を乘せた自動車だつた。
「あツ！」
門前に來掛つた自動車は、車中から逸速く瞳の姿を認めたのであらう。彼女の前まで來ると、車は突然タイヤを停めた。
「やア田村さん。よく來てくれましね。」
「昨日は失禮いたしました。」
「けふは散歩のおついでですか。」
「いゝえ、わざく、お目に掛りたいと思つてまゐりましたの。ですのに、この門番の人が、とても馬鹿な事を云ふもんですから。……」
「貴樣、何か失禮なことを云つたのか」と、兵吾郎の險しい眼が、門衛を睨み附けた。
「はい、別に何も申上げませんが、御用件を覗ひましたので。……」
「そんな餘計なことはせんでもいゝ。馬鹿な奴ぢや。」
「はい。」

「田村さん。まだ私の部屋までは相當ある。これへお乘んなさい。」
「では失禮させて戴きますわ。」
瞳は直ぐに、兵吾郎の自動車へ同乘した。
事務所までは、門を這入つてから正に二丁ばかりあつた。その道の左右には、幾棟かの工場と背中合せに、小さい職工の家とが列んでゐた。
事務所は、その正面の突當りに、まだ塗變へたばかりの、ペンキの匂が漂つてゐる木造の建物だつた。自動車を降りて、給仕の最敬禮には眼もくれずに、その建物に這入つた兵吾郎は、廊下を通つて奥へ行くと、そのまゝ「社長室」の木札の掛つた扉を排した。
「さ、お這入ンなさい。」
「お邪魔ぢやございません？」
「お邪魔どころですか。」
建物が、大して見榮のしないのに反して、社長室は、見違へる程綺麗だつた。机、椅子、卓子、額、鏡――それらの調度が、如何にも落着いて見られた。
「そつちの椅子がいゝでせう。少し樂に出來てるから。……」
「失禮致します。」

カーテンの間から洩れる、秋の陽を背中に受けながら、椅子へ掛けると直ぐに、兵吾郎は卓上のベルを手荒く叩いた。と、空色の事務服を着た少女が現はれた。

「お客様に、お茶を。……」

「はい。」

少女が去ると、兵吾郎は、机の上の葉巻の函から、徐ろに一本を取出して、ライターを擦つた。

「しかしけふは、本當によく來てくれましたね。昨日は少し老酒を飲み過ぎてゐた加減で、大部無躾のことを云つたやうにも思ひますが、どうかあれは、あまり氣にしないで下さい。」

「あら、あたくしこそお見それしたりして、申譯ありませんわ。」

九

「でも社長さんは、時々淺草なんかで、お食事なさいますの？」

「いや」と、兵吾郎は、ちよいと頭に手をやつて、「時々といふ程でもないが、まア一月に一度ぐらゐは出掛けますかな。」

「淺草がお好きなんですの？」

「好き嫌ひぢやない。かうして一つの會社を預かつて居ると、色々な場合、從業員の心狀を知つて置く

必要があるのですよ。そこで時々あゝいふ所へ出掛けて食事をしたり、活動を見たりするが、一流の料理屋などと違つて、氣が張らんで面白いですよ。」

「御婦人の方をお連れンなりますのは、やはりさうした方面の御研究でございますか。」

「あツはツはは」と、兵吾郎は突然、腹の底まで見えるやうな、大口を開いて笑つた。「あんたはなかなか皮肉を云ひ居るね。」

「いゝえ、決してそんな意味ではございません。眞面目でお訊きして居りますの。」

「眞面目に皮肉をいふのは、なほけしからんよ。——いやしかし、それはそれとして、あれは私のとこの、職長の娘だから、誤解をして貰つては困ります。少し耳が惡いといふので、私の友人の醫者を紹介してやり旁々、連れてつたやうな譯なのぢやから。……」

「隨分御親切でいらつしやいますこと。」

「別に親切ではないが、そのくらゐのことをしてやることは、結局こちらの利益ですからな。」

「でも親切なんてこと、口では云へても、容易に出來ることではありませんのに、よく本當に。……」

「いや、それもこれも、詰りは自分の會社が可愛いからですよ。大津兵吾郎が可愛いからです。しかし概して、職工などといふ者は、無智な奴が多いのだから、統率するだけでも、容易なことぢやありません。」

「無智な奴だと仰しやつても、中には隨分しつかりした考への人も、あるのぢやございませんか。」
「いや、そのしつかりした考へといふのが、却ていかんのですがね。職工で、確りした考へを持つて居る奴は、必ず左傾し居るのぢやから困る。一言にして云へば、彼等は無闇と勞銀を貪らうとしてゐる、豚のやうなものですからな。」
「まア、そんなひどいことを仰しやつて。……」
瞳は反感を抱かずにはゐられなかつた。
「あんたは何も知らんから、私が暴言を吐くやうにお思ひのやうぢやが、これは決して暴言でも何んでもない。實際に當つて見れば直ぐに解ることですよ。だから私は、私に心服してゐる奴等には、出來るだけ目を掛けてやつてゐますが、少しでも反抗して來るやうな奴に對しては、頭から壓制で通す主義を執つて居る。」
「壓制で？」
「さうです。愉快ですぞ。ぐいく頭を持上げて來る奴等を、社長の權力を以て、一打に打ちすゑてしまうといふことは。——」
瞳は、兵吾郎のこの言葉から察して、こゝの職工達が、どんなにその横暴に苦しんでゐるかを、考へずにはゐられなかつた。

兵吾郎は、葉卷の灰をかるく叩き落すと、急に落着いた口調に返つて、あらためて瞳を見守つた。
「そこでどうです、田村さん。あなたは、再び會社勤めをして見る氣はないですか。」
「いゝえ」と、瞳は首を振つた。「でも、あたくしのやうな者、どこでも使つて下さらないと思ひまして。……」
「そんな筈はありませんよ。唯あなたが、グレイ商會のやうなところでなければ、いやだといふなら別ですがね。」
「まア、選り好みなどしては居りませんの。」
「ではどうです。實は私は前々から、一人婦人秘書を欲しいと思つて居つたのだが、私の秘書になる氣はありませんか。」
「秘書？」
「どうです。サラリーも十分差上げますぜ。」
「あたくしに、勤まるでございませうか。」
「私の眼鏡に、曇りはない筈ですよ。」

十

――「來たな」と、瞳は獨り心で頷いたが、尙も不安らしいうぶな態度を見せながら、兵吾郎を見上げた。

「でも、社長さんの秘書となりますと、隨分責任が重い譯でございますわねえ。」

「いや、重いと云へば重いが、別に大して面倒な仕事はさせませんよ。そこは悉く私の胸三寸にあるのだから、心配には及ばんことです。――ところで、いまも云つたサラリーの問題だが、君は自活して居るとして、現在月にいくらあつたら滿足して行けますね。」

「さア、滿足なんて、そんなこと仰しやれば大變ですわよ。」

「大變と云つても、女獨りの生活なら、いくらも掛りやせんでせう。」

「あら、そんなことございませんわ。一圓でも生活ですし、百圓でも生活ですもの。生活費なんてものは、これだけあれば滿足だなんて事は、決してないと思ひますの。」

「そりやア無茶だ。そんな豫算のない生活といふものが、この文化の世の中に存在する譯がない。」

「だつてあたくし、豫算を立てて生活するやうなケチな眞似、とても出來ませんもの。それにやツぱり女ですから、お化粧だけにだつて、相當掛りますし。……」

「しかし、そう云はれても、會社としては、法外な月給は上げられんからね。」

「法外に頂戴したいなんてこと、思ひませんわ。でも、どうせ使つて下さるンなら、さつき仰しやつたやうに、景氣よくお極めンなつて下さいましよ。あたくしこれでも、御用は隨分よくお努めするつもりですのよ。」

瞳は殊更この「御用」といふ言葉に力を入れて、得意のながしめで兵吾郎を見詰めた。

「さう。――ではかうしよう。サラリーとして七十圓、それに私のポケットマネーから、化粧料として三十圓、百圓あつたらよいでせう。」

「ほんたうは、百圓ぢや足りないンですけど、社長さんの秘書といふ名前が、あたくしひどく氣に入つちやいましたから、それで使つて戴きますわ。」

「しかし、ちよいと斷つておくが、この給料のことは、たとへ會社の支配人にも、明さんやうにして貰はんと困りますよ。ともかく百圓と云へば、當社としては、破格の給料ですからな。」

「大丈夫ですわ。そんなこと、あたくし決して口外はいたしませんから。……」

「では、善は急げといふこともある。君が入社することを、一應支配人に傳へて置いた方がいゝだらう。」

さう云ひながら兵吾郎は、机上のベルを押した。そして先刻の少女が現はれると、すぐに支配人の岡本を呼ぶやうに命じた。

程なく這入つて來たのは、六十恰好の、人の好ささうな支配人岡本達夫であつた。彼は兵吾郎の前へ

來ると、如才ない商人のやうに揉手をしながら、「何か御用でございますか」と、丁嚀に頭を下げた。

「あゝ」と、兵吾郎は横柄に頷いて、「突然だがね岡本君、今度この人を、私の秘書として採用することにしたから、そのつもりでゐてくれたまへ。いづれ仕事のことは、今後追々相談するとして、一應君に紹介しておきたいと思つて。——」

「結構でございます。」

「田村さん、これが支配人の岡本君です。」

「あたくし田村瞳と申します。どうかよろしくお引廻し下さいまし。」

「私の方こそ、老人ですから、萬事よろしく。」

「この人はね」と、兵吾郎は、あらためて岡本の方へ向き直つた。「佛英和女學校出の才媛で、實は私の遠緣に當る、田村醫學博士の令孃だが、學校を出て嫁にゆくまでの間を、唯漫然と遊んで居るのは勿體ないといふ所から、是非實社會へ出て働きたいとの希望で、來たやうな譯なんだ。ひとつそのつもりで、他の事務員とは、おのづから待遇を違へてくれんと困る。」

「承知いたしました。せいぐ氣を附けまして、他の社員達にも、申聞けて置くことにいたします。」

十一

それからそこに、如何なる相談が出來たか知る由もないが、一時間の後、社長室を出た兵吾郎と瞳とは、既に十年の親しみを持つたやうに、互に氣輕な態度で、自動車の中に納まつてゐた。兵吾郎は、守衛の不審さうな視線に送られて、自動車が門を滑り出ると、直ぐに運轉手に命じた。

「中洲へやつてくれ。」

「はい。」

おそらく、運轉手は腹の中で、またかと感じたのであらうが、無論そんな心持はおくびにも出さずに、如何にも實直らしく頭を下げた。

「田村君。」

「はい。」

「あのグレイ商會のダーモンは、大分君の肩を持つて居つたやうだね。」

「まア、突然何かと思へば、そんなこと、お聞きンなるものぢやありませんわ。」

「しかし、それに相違ないぢやないか。私は屢々あの男から、君の噂は聞かされたからね。さだめし君も、相當彼の好意には報ゐたんだらうね。」

接吻市場

「いやですわ。あたくし、あの方がいくら好意を持つて下すつても、西洋の方ぢやございませんか。」

「さういふが、西洋人は親切で、一度つき合ふと、忘れられないといふことも聞くからね。」

「困りますわ。どんなに親切にして下すつたにしても。――」

「するとやつぱり、日本人の方がいゝといふ譯だね。」

「そりやアどうしても、自分が日本人ですもの。」

と、突然兵吾郎の手は、膝に置いた彼女の手を、ぐつと上から握りしめた。

「あれ！」

「あツはツは。さうびつくりせんでもいゝぢやないか。君も、かうして來るからには、そのくらゐの覺悟はして居るだらう。」

「だつて、急にそんなことをなさるんですもの。」

瞳は半ば怨めしさうな眸で、兵吾郎を凝と見た。が、握られた手は、そのまゝ引かうとはしなかつた。

「昔からよく、白魚のやうな指だといふが、まつたく君の手はその形容のまゝだね。私は正直にいふとこれまでにも隨分色々の女に出會つたが、君のやうな、こんな美しい指を持つた人に出會つたのは初めてだよ。――かうなると、實際ダーモンは、殘り惜しくて死に切れなかつたらうよ。」

「あら、またそんなことを仰しやつて。――後生ですから、もうダーモンさんのことなんか、仰しやらないで下さいましよ。」

「失敬々々。別に惡意でいふのぢやないが、ついこんな美しい手を見ると、口が滑つていかん。しかし君、私のやうな老人でも、かうして自動車に同乘して來るからには、君にも多少、氣に入つたところがあるのだらうね。」

兵吾郎は、運轉手の前も憚らず、益々押しの一手で、瞳に喰ひ入らうと努めた。

「そりやアありますわ。」

瞳の答へは、その眼と共にかなりコケティッシュだつた。

「さうか。やはりあるか。一體どこが氣に入つたか、云つて見たまへ。」

「お金持だといふことが、はつきり判つてゐますもの。」

「はツはツは」と、兵吾郎は面白さうに笑つた。「愉快なことをいふね。君は外見ばかりでなく、心の底まで美しい。――もつとこつちへ來たまへ。」

「あら、駄目ですわ。」

その瞬間、彼女の手が、かるく兵吾郎の頰を叩いた。

「いゝぢやないか、君。」

「いけません。あたし、サラリーを頂戴しないうちは、あなたの秘書ぢやありませんの。」

「はツはツは。これはいゝ事をいふ。では早速サラリーを出さう。」

「いゝえ、あたくし正式に、會計の手から受取らないうちは。……」

十二

兵吾郎が夢中になつて、瞳の肩に手を掛けようと焦つてゐた時、自動車は中洲への橋を渡るとそのまま、大岩病院の角を左折して、旗亭「都川」の門前に轍を停めた。

「お待遠さまでございました。」

運轉手の言葉に、流石にあわてた兵吾郎は、轉がるやうにして自動車を降りたが、それでも社長の威嚴だけは、傷けまいと思つたのであらう。彼が癖の、チョッキの兩脇に拇指を入れると、反身になつて運轉手に命じた。

「歸りには電話を掛けさせる。一度歸つて居れ。」

「はい。」

兵吾郎に續いて、瞳も車を降りた。が、この時彼女の心には、既にこれから先遭遇すべき、事件に對する用意が、完全に整へられてゐたのだつた。

「いらつしやいませ。」

女中の出迎へに、聊かもテレた樣子さへなく、兵吾郎は先に立つて、衝立の影へ消えて行つた。瞳は

わざとしとやからしく裝つて、少し伏目がちに、その後に續いた。

通されたのは、大川に面した、階下の一室だつた。肌寒の心地を覺えるまでに冷々した川風が、斜めに障子を射た陽の色に吸はれて、川向ふに見える淺野セメントの建物も、妙にうすら寒かつた。

座に着くか着かないうちから、兵吾郎は女中に酒を命じてゐた。

「けふは日本酒はいかんよ。角壜を一本取つてくれ。」

「ウヰスキーでございますか。」

「さうだ。こんなハイカラなお客樣をお連れしたんぢやないか。」

「あら、あんなことを仰しやつて。……」

瞳はわざと、睨めるやうに兵吾郎の方を見た。

「いや、それは冗談だがね。兎に角ウヰスキーだ。」

女中が出てゆくと、兵吾郎は急に思ひ出したやうに、上着のポケットから紙入を取出して、中から一枚の百圓紙幣を拔いた。

「では田村君。これは今月のサラリーだ。」

「あら、今月ツて、もう半月しかありませんのに、こんなに頂戴してもよろしいんですの？」

「そんな心配はいらんよ。私は君を日給で採用した譯ではないのだから、月給は月給で差上げる。」

「申譯ありませんわね。あたくしまだ、ちつとも仕事もしませんのに。」
「はツはツは。仕事はいつでも出來る。君は私の秘書なのだから、私の命ずることだけをしてゐて貰へばそれでよいさ。」
そこへ、別の女中が、風呂の加減がいゝからと知らせに來た。
「どうです。君も一緒に這入らんかね。」
兵吾郎は當然のことのやうに、瞳に云つた。
「あたくし、別に汗もかいて居りませんから。……」
「こゝの風呂場は、決して氣味の惡いやうなことはないぜ。相當廣いし。……」
「でも結構ですわ。どうかお構ひなく。——」
「あツはツは。どうもお孃さんはいかん。かういふ時に勇敢でなくて。——ぢやア私だけ這入つて來るから、その間、川の景色でも見てゐたまへ。」
女中の後から、兵吾郎の巨體が廊下に消えて行つた。
瞳は直ぐに窓際へ駈け寄つて、大川の流れを凝視した。下は築地河岸から上總澪まで、パノラマのやうに展觀されたが、上は永代橋の橋脚に、現はれては消える帆影が見える外は、兩國以北の風景は映らなかつた。

「——虎行さん、今頃は何をしてるだらう?」
さう思ふと、瞳は急に、胸が一杯になるのを覺えた。
「さうだ。あたし、このまゝ歸つてしまはう。社長が何か云つたつて、明日はあしたの風が吹くんだ。」
彼女は這入つて來た廊下を、入口の方へ急いだ。

十三

翌日瞳は、定刻の午前九時に、武藏車輛株式會社の事務所へ出社した。社長はまだ來てゐなかつたが、支配人の岡本を初め、三十人近くの社員は、大方顏を揃へて、各自の仕事を始めてゐた。
社長室の一隅には、既に瞳の席が用意されて、誰の心遣ひか、鐵の花瓶に、二三輪の白菊が挿てあつた。
「昨日はどうも失禮致しました。」
さう云つて、岡本の前に、丁嚀に頭を下げた瞳の全身には、丁度兵隊が射場に懸けた的を見詰める時のやうに、一齊に一同の視線が集まつた。中には何か奇蹟でも發見したかの如く、興奮の眼を見張つてゐる者さへあつた。
岡本は瞳を見ると、直ぐに大勢の社員の、最も目立つ所へ連れて行つた。前日社長から命ぜられた紹

介の責任を、一刻も速く果さうためだつた。
「諸君」と、彼は演説口調で一同に呼び掛けてから、「御紹介しますが、こゝに居られる方は、田村瞳さんと仰しやつて、今度、社長の秘書役になられた方であります」と、寧ろ自分の得意でもあるやうに、大きく見得を切つて見せた。
誰かが「賛成！」と、叫んだ。
「實はこの方のお父さんは、外科のオーソリチー田村精一郎博士でありまして、社長の御知友なのでありますが、瞳さんは女學校を出られて、漫然と遊んでゐるのは心苦しいとのお考へから、今度社長の許で、働くことになつたのであります。で、諸君もどうか、そのお考へで飽くまで自重して、御交際下さるやう、私からもお願ひしておく次第であります。」
「どうかよろしくお導き下さいませ」と、瞳は極めて簡單に、頭を下げた。
一通りの紹介が濟んで、支配人と瞳とが、社長室へ引上げてしまうと、若い社員の間には、忽ち様々な臆測が交はされた。
「とてもシャンだね。」
「本當に友人の娘かしら？」
「どうして？」

「だつて僕は、どうも社長の何かのやうな氣がするんだがね。」
「そんなことはあるまい。とても純眞らしいぢやないか。」
「判るもんか。女は化物だ。それに社長が、あの社長ぢやないか。」
「もしもそんなことだつたら、僕は斷然憤慨するね。」
「會社を止すか。」
「止しやアしないが、社長に忠告するよ。」
「忠告なんかすりやア、その場で首だぜ。」
「僕は飽くまで、今の岡本さんの言葉を信じるね。あんな天使のやうな人が、社長如きの。……」
「でも、秘書役といふ事實には、變りはないだらう。」
「そりアさうだが。……」
こんな噂に、一同は仕事も手に附かないでゐる時、社長室では、支配人と瞳とが、卓を隔てて向合つてゐた。
「既に御存じでせうが、何しろ社長はきかん氣の方でしてな。あなたがお出で下すつたので、これから私も、どんなに助かるか知れませんよ。」
「隨分、お氣むづかしやのやうでございますね。」

「氣むづかしやにかけては、あのくらゐの人はありますまい。しかし、あなたならば大丈夫です。あなたになら、決して無理な小言を云はれるやうなことは、ありませんよ。」

「どうしてでせう？」

「いや、どうしてといふこともありませんが。そこへ行くと、我々のやうな老人と違つて、若い、美しい方は得ですよ。」

「あたくし、そんな自信ございませんわ。」

「いや、それは謙遜といふものです。——そこでひとつ、早速ながら私から、折入つてお願ひがあるのですがな。」

「まア、どんなことでございませう？」

瞳は、流石にこの支配人の厚かましさに、眼を見張らずにはゐられなかつた。

十四

「といふのは外でもないのですが」と、いひながら、支配人は内ポケットから茶色の封筒を取出して、「實はこれは、職工一同の申出でしてね。これをあなたから、社長にお話願たいと思ふのですが。……」

瞳は、岡本支配人が、卓上へ展げる書面を、默つて見詰めてゐた。それは會社用の業務用紙に、筆で

克明に認めたものだつた。

一、職工夜勤手當增額ノ件

從來職工ノ夜勤手當ハ一時間ニ附金五十錢ヲ給シ居リ候處、御承知ノ如ク去ル六月ヨリ三十錢ニ減給仕リ候、然ルニ今回更ニ職工一同ヨリ舊ノ如ク復活サレタキ旨出願有之候、如何取計ラヒ申可クヤ貴意ヲ得度候。

そしてそこには、大八車の輪のやうな支配人の印が、ペタリと捺してあつた。

「つまり、こゝに書いてあるやうな問題なのですが、これを私から申しますと、社長は一も二もなく拒絶されるに定つて居るんです。しかしこの場合、私も職工の上申は、無理ならぬことだと思ひますので、ひとつ貴女にも捺印を願つて、社長の方へ提出して頂いたら、きつと成功することと思ふのですが。……」

「隨分官僚式なんですわね」と、瞳は皮肉に笑つた。

「官僚式といふのかどうか判りませんが、當會社は全部この調子ですよ。社用のゴム印一つ作るにも、社長の判がなければ出來ないのですから。——」

「でも、そんな些細のことなんか、あなたの職權で、どん〳〵おやりになつたら、よろしいぢやございませんか。」

「どうしまして。そんなことをしようものなら、それこそ忽ち首が飛んでしまひますよ。先日も社長に無斷で、社用の封筒を一萬枚註文しました處、その値段が高すぎるといふので、えらく揉めましてね。いや、支配人なぞと云つても、當社ではほんの名儀ばかりですよ。」

「よござんすわ。そんな量見の社長さんなら、あたくしこれから、そのつもりで教育しますわ。」

「どうかひとつ、あなたの力で、今後十分お願ひしませう。——ではまづその皮切に、この上申書のお取次を、よろしくどうぞ。」

「承知いたしました。うまく成功するかどうか存じませんが、あたくし腕だめしにやつて見ますわ。」

實際、支配人といふにしては、餘りに腰の低い如才なさを、岡本は見得も外聞もなく、瞳の前にさらけ出して、ペコ〳〵しながら、事務室の方へ出て行つた。

「チエ！　何んて哀れな姿なんだらう。あんなにまでしても、首が大切なのかしら？」

瞳は、岡本の後ろ姿が哀れであるだけに、一方、社長の專横さが、妙に憎く見えてならなかつた。が彼女は、兎も角自分が秘書としての役目であるところの、社長の机の鍵などを開けて、その邊を整理してゐた。

すると、社長室の電話のベルが、けたたましく響いた。

「もし〳〵。」

相手は兵吾郎だつた。

「あ、社長さんですか。——はい田村でございます。」

瞳の聲は、少しの惡びれた樣子もないまでに朗かだつた。

送話口で、どもつてゐる兵吾郎の態度が感ぜられた。が、瞳はそれには構はずに、押冠せるやうに云つた。

「そんなら今日は、おいでンなりませんの？　何か御用は？」

どうしたことか、電話はそのまま切れて、再び掛つて來なかつた。瞳は肩をゆすつて苦笑した。

「怒つてるんだよ。馬鹿々々しい。たとへ唇一つだつて、さう簡單に盜まれてたまるもんか。」

虐げられし人々

一

「ぢやア社長さんは、どうしてもこの職工達の要求は、お取上げンならないと仰しやるんですか。」
「さうだ。こんなことは問題ぢやない。一體かうした書面を私に取次ぐのからして、間違つとるよ。」
「でも、あんまり職工達が可哀想だと思ひまして。——」
「職工達が可哀想だ？　馬鹿を云つちやいかん。この間も話したやうに、職工などといふ者は、豚のやうなもんだからね。餌を與へれば與へるだけ、いくらでも食ふんだ。彼等には、もうこれでよいといふ滿足はありやアせんよ。」
二三日、近縣旅行といふ名目で、社へ出て來なかつた社長は、瞳から、職工達の夜業手當增額の書面を受取ると、吐き出すやうに云ひ放つた。
「馬鹿な奴等だ。あまりうるさく云ふなら、片ッ端から首にしてしまうぞ。」
「まア！　そんなことを仰しやつて。——」
「私は、決して無理は云つては居らんのだから、面倒な奴等は、首にするより外にない。大體給料など

といふものは、雇ふ方が定めるものであつて、雇はれる方、即ち被雇傭者の側から、定めるものではないのだ。君はいゝから、そんな不愉快なことには、係はるのをよしたまへ。」
瞳は、この惡雇主に對して、心から憤然たらずにはゐられなかつた。——連日こゝの工場で、汗水垂らして働いてゐる忠實な職工達。しかもその家族が、惠まれないその日〳〵を、幽に送つてゐる氣の毒な職工達。そこに一人として、社長の如き不正直な、狡い男は、影も見られない程、純情な職工達の生活に、一日僅かに二十錢足らずの賃金を增してやることが、それ程不愉快であらうか。——女に對して拂ふ金には、微塵も未練を持たぬくせに、眞の勞働に對して、當然支拂ふべき金には、頑として一錢の餘裕も見せまいとする、そこに現代の資本家氣質が、まざ〳〵と溢れてゐた。
が、兵吾郎には、もとより、瞳の心を推察する氣持などは、ありやうがなかつた。それよりも過日將に到着點まで行きながら、一瞬にして巧に手の中から脫け出されてしまつた、あの旗亭に於ける出來事が、表面に出して怒りもならない事だけに、ともすれば胸の底から込み上げて來る「敗北」の氣持を、矢鱈にいら〳〵させるばかりだつた。
彼は急に口調を柔げて、話頭を轉じた。
「しかし君は、實にいかんね。」
「まア！　どうしてですの。」

接吻市場

「私に無斷で歸るなどとは、實際けしからんぢやないか。」
「あゝ、あの時。――」
「あの時ではないぜ。一體何んであんな眞似をしたんだ。」
「だつて。――」
「だつてぢやない。あの茶屋に對して、私がどんなに面目ない思ひをしたか、考へて見てくれ給へ。」
「濟みませんでした。ちよいと譯があつたもんですから。……」
「どんな譯があつたんだね。」
「あたしね」と、瞳は急に甘えるやうに云つた。「あたし、百圓てお給金は、秘書役だけのサラリーだと、思つてるんですもの。」
「秘書役だけの？」
「えゝ。――でないとすれば、あたしやつぱり、三百圓は頂戴しなければ。……」
「え！　三百圓？」
「まア氣の小さい方。――社長さんの御身分で、秘書役に三百圓ぐらゐお出しンなるのは、何んでもないぢやございませんか。」
「ふん、君はなかなか勇敢にやるね。」

「だつて、あたし藝者や女優ぢやありませんもの。」
「よし！　判つた。では君の希望通りに出さう。」

二

一日休んで、その翌々日出社した瞳の唇には、目立たぬほどの、絹絆創膏が張つてあつた。
「もうこつちのものだ。一時間や二時間の遲刻なんか、問題ぢやない。――」
さう高をくゝつた彼女は、前夜貰つた、殘りの二百圓を懷中にして、出社の途中を銀座へ出ると、過日三枝のショー・ウヰンドで見ておいた、佛蘭西製の、赤に霜降りのあるスェーターを買つたりしてから、悠々と出社したのだつた。
「ちよいと濟まないけど、あんたこゝを貸してね。」
門衛の詰所で、最初社長に面會に來た時とは、打つて變つた巡査上りの爺さんの、ペコ〳〵した態度を尻目に掛けながら、買つて來たスェーターを着換へた瞳は、そのまゝ事務所へ急いだのであつたが、社長室の窓下まで來ると、いつになく室内が騷がしいのに氣附いた。
「おや！」
「ではお前達は、飽まで私に楯を突くつもりなんだな。――」

癇高い社長の聲が聞えた。

瞳は、窓硝子の一部が、三角形にかけてゐるのを幸ひ、そこから凝と内部の様子を見守つた。

「楯を突く譯ぢやありませんが、何しろこの上二割も日給を減らされちや、私達は滿足に、握り飯も食へませんからね。」

社長の周圍を、圓く取捲いた七八人の職工達の、先頭に立つた一人が、かう云つて、それでも社長の機嫌を、損じまいと思ふのであらう。ピョコリと一つ頭を下げた。

「飯が食へんけりや、止めたらどうだ。私の工場は決してお前達の想像してゐるやうな、利益などある譯はないのだ。この不景氣に月々何千圓といふ、莫大の損失をしながら、尙且つ仕事を繼續して行くのは、會社の體面ばかりではない、お前達の身の上を思ふからぢやないか。馬鹿な。その親の心も知らずに、子のお前達が、私に抗議を持込むなどとは、身の程を知らんにも限りがある。働けんといふなら、いつでも止すがいゝ。この工場で働きたがつて居る職工は、世間には腐る程あるぞ。」

それだけ聞けば、瞳にはもはや總てが判つてゐた。彼女は急いで、事務所の方へ歩を運んだ。

事務所では大勢の社員達が、一所に集まつて、ひそ〳〵と語り合つてゐたが、瞳の姿を見ると、急に口を噤んでしまつた。高島といふ一人の社員が狐のやうな顏を、こつちへ振り向けた。

「高島さん。一體どうしたんですの？」

「いや」と、彼は、妙に神經質になつてゐる眼を、一層輝かして、「例のことで、相談中なんですよ。」

「例のこと？」

「あなたは昨日缺勤されたから、御存じないかも知れませんが、實は昨日社長から、社員並びに職工に對して、二割減給するといふ言ひ渡しがあつたんです。で、一同大騒ぎをやつてるんですが、元々この會社の社員なり職工なりの給料は、同業の他の會社工場に較べると、二三割も下位にあるんですからね。それをまた、更に二割減給されては、我々は到底生活が出來ないんです。無論この不況時代ですから、私達としても、忍べるだけは忍びますが、食はずに生きることは、私達には出來ませんからね。」

「實はあたし今、社長室で、職工さん達が社長に掛合つてゐるのを立聞して、憤慨してるところなんですの。」

「では田村さんも、僕達の味方になつてくれるんですか。」

「むろんですわ。あたしかう見えても、とても正義派なんですからねえ。」

「有難い。それでこそ我等の田村孃だ。」

一同の面に、云ひ知れぬ活氣が映えて來た。

三

「ところでも一つ、田村さんは御承知かどうか知れないが、こゝの職工のうちには、一人も月給の人間はゐないんですからね。」

「すると？」

「みんな日給ですよ。」

「社員の方はまさかさうぢやないんでせうね。」

「それア、社員はまさか日給ぢやありませんが、殆んど、それに近いやうなもんですよ。表面上月給になつてゐますがね。一日休めば、幾らつて引かれるんですから、隨分慘めなものぢやありませんか。その上それを二割も減らされるんだから、憤慨するのも當然でせう。」

「本當ですとも。女のあたしが聞いてさへ、胸が沸え繰り返るほど癪に障るわ。男のあんた方が憤慨するのは當然よ。」

「で、變なことを聞くやうですが、一體田村さんは、どのくらゐのサラリーで、社長の秘書になられたんです」と、最後列にゐた丈の高い社員が訊ねた。

「あたし？　あたしね、驚いちやいけませんよ。三百圓なんですの。」

「え、三百圓？」と、一同は異口同音に瞳の顏を凝視した。

「さうなんですの。隨分不思議でせう。でも誤解しちやいけませんわよ。あたし、幾ら使用人になつて

も、あんな人に唇一つ許しやアしないんですからね。」

「何んと云ふ不公平なんだ」と、そのうちの一人が叫んだ。

「本當に、あたし自身もあなた方のお話を聞いて、こんな不公平なことが、他にあらうかと思ひますわ。あたしのやうな者に、そんな大金をくれるくらゐなんですもの、この會社は無論儲かつてるに違ひありませんわねえ。」

「勿論ですとも、會社は半期毎に一割の配當をしてゐる上に、相當の繰越金を殘してゐるんですよ」と、會計課の一社員が得意らしく云つた。

「何んて無茶なんでせう。今時、二割の配當をするなんて、それぢやまつたくみなさんは、株主のために働いてゐるやうなもんぢやありませんか。この下半期からは、株主配當を五分にして、殘りの一割五分を社員や職工たちの給料に、振替へて貰ふやうに交渉なさいよ。」

「どういたしまして。一割五分どころか、例へ五分でも株主配當を、我々の給料へ振替へるなんて要求をしたら、それこそみんなの首が同時に飛んでしまうでせう。」

「まア、氣が弱い！　そんな腰の弱いことぢや駄目ですわ。社長のやうな人は、下から出てゐたら、どこまでだつて、あなた方を虐待するにきまつてますわ。」

この時突然社長室から、癇高い社長の聲が聞えて來た。

「駄目だと言つたら解らんのか。私の言ふ事が腑に落ちんのなら、今日限りやめてもらはう。」

この聲を聞くと同時に、瞳は、我を忘れて廊下から社長室へ駈け込んで行つた。

社長は、日頃の赭ら顏を一層眞赤にして、今や卓子の上を掌で力任せに叩いゐるところだつた。

「あら社長さん、どうあそばしたんでございますの。」

瞳はわざと甘えるやうな調子で社長の顏を見上げた。

「君には解らん」と、兵吾郎は靜かに瞳を制して、再び職工たちの方へ向直つた。

「私はもう一度だけ人情を以つて云ふが、お前たちは、思ひ直したらどうだ。この會社にゐればこそ、相當な給金も取れるのぢやないか。失業してしまへば、一錢の金だつて、人はたゞ呉れやせんぞ。」

「どうしよう兄弟」と、先頭に立つた職工が、一同を振向いた。

「仕方がねえ、今更相談のしやうもないが、兎に角一旦工場へ行つて、もう一度みんなと相談して見るんだな。」

四

職工達が、油に汚れた勞働服の肩を萎めて、悄然と社長室から姿を消してしまうと、突然兵吾郎は腹を抱へて笑ひ出した。

「あツはツはツ。——何んといふ馬鹿共だ、私が一旦かうと云つたら、決して撤回するやうな氣性でないことを承知しながら、減給の陳情に來るなんて、先が見えんにも程がある。なア田村さん、さうぢやないか。」

「違ひますわ」と、瞳は強く云ひ放つた。

「何、違ふ？」

「えゝ、あたくし違ふと思ひますの。あの人達があゝして陳情に來るのは、減給されては、ほんたうに困るからぢやないでせうか。それでなければ、辱を忍んで、誰もあんなに熱心に、お願ひに來る筈はないと思ひますわ。」

「ほう、君までが、そんな判らんことを云つては困るな。大體職工などといふ者は。——」

「いゝえ、その、社長さんの職工に對する最初のお考へが、失禮ですけど、間違ひだと思ひますの。いつかも、職工は豚のやうなものだと仰しやいましたわねえ。あたくしあの時、よつぽどさう申上げようと思つたんですけど、餘計なことを申上げるものぢやないと考へて、口の先まで出かゝつてゐるのを、止めた事がございました。——職工だつて、社長さんと同じやうに、思想も持つて居りますし、辱も知つてゐる人達ですのに、豚や犬に例へるのは、あんまりひどいと思ひますわ。」

「それだから君は、お孃さんだといふんだよ。ひどいとか、ひどくないとかいふのは、對等の人間に向

つていふことで、自己の使用人に對して、用ふべき言葉では絶對にないのだ。また假令ひどいことを云つたとしても、金を拂ふ方と貰ふ方ぢやないか。何事にも權利が、拂ふ立場に居る者にあるのは明らかな話だからね。それを無躾にも、私の部屋へ押し寄せて來るなどとは、言語道斷、沙汰の限りだ。」

「まア！　それぢやあんまり、職工達が可哀想ですわ。」

「可哀想も氣の毒もありやアせん。實際に儲かりもせん金を、職工や社員のために絞り取られる私の方が、どんなに可哀想だか知れんぢやないか。」

「でも社長さんは、株主には、二割の配當をしておいでぢやないんですか。」

「え！」

「あたくし、ちやんと知つてますのよ。」

「知つて居つても、一向差支へないが、それは資本家あつての工場といふことを考へれば、當然のことだからな。株主に厚くするのが不平な奴は、最初から私の會社で働く權利はない筈なんだ。」

「そんな事を仰しやつて、もしも職工達が、ストライキでも起したら、どうなさるお考へですの？」

「ストライキ？　冗談云つてはいかん。それ程の意地のある奴は、こゝには一人も居らんのだから、安心するがいゝ。飼葉が多からうが少からうが、當てがはれただけでやつてゆくのが、家畜の本分ではないか。その點は多年の經驗で、この羊飼が先刻御承知だよ。」

「でも、今の樣子では、さう安心も出來ないと思ひますわ。人間、食べることが出來なくなれば、どんなことでもするだらうと思ひますの。」

「まアいゝ、君はそんな取越苦勞をせんで、こゝへ來て、私の肩を、二つ三つ叩いてくれんか。詰らぬ押問答をした爲めに、肩が凝つていかんから。——」

「あたくし、お斷りします。」

「斷る？」

「あたくし、けふは氣分が勝れませんから、これで歸らせて頂きます。」

「まだ、晝前ではないか。そんな我儘を云つてはいかん。それがために君には、過分の給料を。——」

「過分ですツて？」と、瞳は眼を見張つた。

五

接吻市場

「あたくし、憚りながら、決して過分のお給金は、頂戴して居りませんの。」

瞳の口許には、いつの間にか冷笑が浮んでゐた。

「貰うて居らんことはあるまい。日給七十錢の職工からさへ、二割の減給をさせにやならんと思つとる私が、三百圓といふ大枚の給料を出してとるといふことは。……」

「大枚ですツて？」

「さうぢやないか。この不況時代に三百圓と云へば、決して少い金ではないことぐらゐ、君にも判るだらう。」

「三百圓と云ふお金は、少くないかも知れませんわねえ。ですけど、あたしの唇から云へば、そのくらゐのお金、ほんのはしたに過ぎませんもの。」

「はした？」

「えゝ、その通りですの。——何しろあたし、けふはこれでお暇をさせて頂きますわ。頭痛がして堪りませんから。……」

「田村君！」

兵吾郎の聲は鋭かつた。

「何んですの？」

「君は、私を欺す氣なのか。」

「欺すなんて、そんなこと、どうしてあたくし、するもんですか。」

「いや、確かに欺す氣だらう。職工達の不平をよい事にして、私との約束を反古にする氣に相違あるまい。——よし、それならそれでいゝ。私は今後、覺悟をして君を扱ふから、そのつもりでゐたまへ。」

「まア！、勝手に御自分でお極めンなつて、當推量も甚しいわ。」

じり〳〵とドアの側まで來てゐた瞳は、かういふと同時に、颯と身を飜へして、廊下へ飛び出してゐた。

「今日は絶對に歸さん！」

兵吾郎のさうした最後の聲を、社長室に聞き殘した彼女は、掻き捲られるやうな氣持で、半丁ばかり離れてゐる工場へ走つた。勿論瞳は、そこのモーターが停止してゐることを想像してゐた。が、近着くにつれて、きのふと同じモーターの音は、少しのよどみもなく耳を奪つた。

鑄造場の中には、盛んに火が燃えてゐたし、木工場の圓錐は、二十日鼠のやうに回轉してゐた。唯、しかし、そこに働く多勢の職工達の、おゝ、何といふ生氣のないことであらう。

瞳は默つて周圍を見廻した。と、彼女の姿を見て、あわてて鑄造場の奥から出て來たのは、先刻の職工代表の一人だつた。瞳はもう堪らなかつた。

「どうしたのよ、一體。こんなに盛んに仕事をしてるなんて？」

思ひ掛けない瞳の見幕に、他の職工達一同も、仕事の手を止めて、入口の方を凝視した。

「相談をすると云つて、社長の前を引下つたんぢやないの。それだのに、まるで海鼠のやうに足腰もなくして、仕事を始めるなんて、そんな弱いことぢや、あんた方の男は丸潰れぢやありませんか。」

「それやアさうなんですが。…… 泣く子と地頭にや勝たれねえツて、やつぱり社長の文句通り、こゝを止しやア、急に働くところはありませんからねえ。」

「ちエ、馬鹿々々しい。何んてくだらない考へなんだらう。そんな氣だから、飽くまであの强慾な社長に、乘ぜられるんぢやないの。ちつと確りしてよ。口でこそ二割減だけど、二割と云へば、七十錢の人は五十六錢になるのよ。いくらみじめな生活をしたつて、一日五十六錢で、妻が有り子が有る人が、暮して行ける譯はないわ。」

「そりやア私達だつて、暮して行けねえのは知つてますが。……」

「いけない！」と、瞳は叫んだ。「このお金を提供するから、これを軍資金の一部にして、飽くまでも闘つて頂戴。」

さう云つて、ハンド・バッグを開いた彼女の手には、十數枚の十圓紙幣が握られてゐた。

六

職工は眼を瞠つた。

「ぢや、罷業をやれと云ふんですね。」

「さうよ。—— あなた方は、このまゝ泣寢入りをしてしまうつもりだつたの？ 何んて意氣地がないんでせう。そりやア無闇に爭議を起して、闘爭のための闘爭をするのは、あたしだつて好まないけど、今度のことは、正當な報酬を求めるためにやるんぢやないの。—— よく考へて御覽なさいよ。あなた方は働いてるのよ。遊んで食べさして貰つてるんぢやないんですよ。だから勞力に相當する報酬を求めるのに、何んの不合理があるの。それに、會社は儲かつてゐて、この不況に株主配當を二割もしてると云ふぢやありませんか。斷然罷業なさいと、お勸めするわ。それには、あたしに考へがありますから、萬事委せて下さればいゝんですから。……」

瞳の口調は、亢奮に燃え立つてゐた。

職工は暫く沈默を續けてゐたが、やがて兩手を擧げて、一同の方へ向直つて叫んだ。

「よし！ やらう！」

その職工は、鑄造工であると同時に、職長の名を貰つてゐる重岡だつた。彼はやにはに、工場も破れんばかりの大聲で怒鳴つた。

「みんな機械を止めて、外へ集つてくれ！」

すさまじい音を立ててゐた機械が、忽ち運轉を休止した。

「おーい、みんな外へ集れ！」

再び重岡はさう叫ぶと、自ら先に立つて、工場外へ駈出した。次いで他の職工も續々と、工場前の

廣場に集つた。重岡の命令で、廣場の櫻の樹の下に、數個の石油の空箱が運ばれた。重岡はその急造の演壇を指して、瞳に云つた。

「さ、田村さん。もう一度あなたから、みんなを說いて下さい。」

瞳は、これまでに一度も、演說といふことをした經驗がなかつた。が、思ふことを率直に喋ればよいと考へて、大きな決心の下に、勢よく石油箱の上に飛上つた。そして「皆さん！」と、一聲高く叫んで一同を見渡した。

貧と過勞とのために憔悴した顏が、無數に彼女の眼に映じた。四邊は水を打つたやうに靜かであつた。

「あたくしは皆さんと、今まで親しくお眼にかゝつたことはございませんが、もはや御承知の方もおありのことと存じます。あたくしは、十日ばかり前から、こゝの社長の大津兵吾郎の秘書役をして居ります、田村瞳と云ふ者でございます。」

突然、職工達がざはついた。社長の秘書役と聞いて、彼等は失望した結果らしかつた。はやくもそれと察した瞳は、一段と聲を張上げた。

「ですけどあたくしは、社長の味方でもなく、社長の探偵でもございません。あたくしは失禮ながら、あなた方の味方でございます。——實を申上げますと、きのふまでのあたくしは、世間から不良少女と、して、爪彈じきされて來た女なのです。いゝえ、今以つて不良少女でございませう。この不良少女が、

おこがましくも、神聖な勞働に携はる皆さん方に、こゝに立つて、一場のお話を申上げようと云ふのは、眞に潛越極ることかも知れませんが、たとへ不良少女にしろ、苦しい時には、お互ひに助け合ひ、嬉しい時には、お互ひに喜びたい氣持を、人一倍持つてゐる者でございます。それにも拘らず世間は、一概に不良少女といふと、無貞操な人間として、これを葬り去らんとするのでございます。そして、何故に不良少年や不良少女を生んだかに就いては、彼等は決して、反省してはくれないのでございます。彼等とは誰でせう？　それは有產有閑階級の人々の一部でございませう。一部と云ふ言葉は、卑怯なやうにも聞えませうが、有產階級の中にも偉大な人は有ります。同時に、典型的な人物がもございます。」

七

職工達のざわめきはいつか消えて、凝と瞳の言葉に耳を澄した。瞳も亦上氣した美しい顏を上げて、雄辯に喋り續けた。

「では、その一部の人とは、どんな人間であるかと申しますと、最も近い例を引いて見ますと、當社の社長大津兵吾郎氏のやうな人を云ふのでございます。大津氏は、或は社會的標準から見ましたら、有產とは云へないかも知れませんが、二人も三人もの妾を蓄へ、その上毎日花柳界から花柳界へ遊び廻つて、飽くことを知らない。從つて有產者と云へるでせうし、同時に有閑階級と申すことも出來ると思ひ

ます。さうして斯様な非難すべき、有産有閑階級者の通有的性格は、眞の人情がなく、涙がなく、徹底的利己主義で、色情的で、壓制で、暴逆で、たとへ他人が飢死しても、自分の慾を滿すためには、如何なる犧牲を拂ふことも、平氣なのでございます。」

瞳は、何を喋つてゐるか殆んど夢中であつた。職工達は、屢々無産派の演說會などで聞いた、煽動的の演說と異つた彼女の絕叫に、好奇の眼を輝やかしてゐた。

「聞いて下さい！」と、一寸言葉を切つてから、再び彼女は高く叫んだ。「社長は、一人の不良少女のこのあたくしを傭ふために、どんな待遇を與へたとお思ひになりますか。驚いてはいけません。三百圓といふ巨額を、毎月支出することを約束したのでございます。そして、名目こそ秘書役でありますが、あたくしは過去十日ばかりの間に、一度として秘書らしいこと、仕事らしい仕事をしたことはございません。働かないものに、なぜ左樣な大金を支出するのでせう？　露骨に申上げれば、社長は、仕事よりも、若いあたくしの身體が欲しかつたのでございます。しかし、あたくしは、敢然その誘惑を斥けました。そして、あなた方のお味方にならうと決心したのでございます。」

パチ〳〵と、拍手を送つたものがあつた。

「そのやうに、自分の色慾や遊興のためには、千金を拋つても悔ひない社長が、皆さんに對する態度は、どうでせう？ 社長はあなた方を、どんなに慘酷な仕打ちをしようとも、絕對に服從する奴隸と思つてゐ

るに相違ございません。羊だと云つてゐるのです。奴等は人間ではないと嘲つてゐるのでございます。いふまでもなく、正しく情のある相手に對して、無暗に反抗する態度は、よろしいことではございませんが、一度相手が、あたくし達を人間視しなかつた場合は、一時の反抗は許されることと思ひます。皆さんは、職工及社員の代表の方が、社長と會見した時の、あの態度をお聞きになりましたか。側で聞いてゐましたあたくしは、餘りの亂暴さに、思はず手足が顫へました。それにも拘らず、直接關係のある皆さんは、默々として就業なさいました。――」

職工達は、凝と首を垂れて、咳一つ發する者もなく、明らかに彼女の熱辯に動かされてゐた。

「さうした美しいお心の皆さんに對して、あたくしはお訊ねせずにはゐられません。皆さんは、朝早くから露を踏んで、夜は遲くまで働いてゐて、それで生活が出來ないことを、何んともお考へにはなりませんか。いゝえ、この會社が、多くの利益を擧げてゐながら、他の會社よりも、二三割も安い給料であつたその上、尙も二割も減俸するなんてことを、不合理だとはお思ひになりませんか。しかも、奴等は羊だ、豚だ、人間ではないと嘲笑されても、口惜しいお氣持が起りませんか。皆さん！　當然得られるものを求めるのに、何んの不都合がありませう。求めて下さい！　起つて下さい！　この際あたくし達は、世にいふ見苦しい爭議を起すのではありません。當然得られる物を、團結して要求するに過ぎません。さア、あたくしのいままで申上げたことが、お判りの方は、直ちにこゝを引揚げて下さい。」

八

すると、突然中央から叫んだものがあつた。

「さうだ！　俺達は働いたものを求めるに過ぎないんだ！」

「さうです！」と、瞳は壇上からそれに應じた。「正當なものを、團結して求めるに過ぎないんです。」

すると、職工達の背後から叫んだのは、重岡職工長だつた。

「さア、みんな引揚げてくれ。表門を出たとこの、菓子屋の横の空家を借りて來た。あすこの裏の廣場へ、みんな引揚げてくれ。」

瞳の演説中に、逸はやく重岡が用意を整へて來たものらしかつた。

「さア、愚圖々々してゐて邪魔が這入るといけねえ。一齊に引揚げるんだ。」

さう云ふ重岡の言葉を合圖に、職工と社員との一同は、「わツ」と喊聲を擧げて、表門へと走り出した。

その瞬間、事務所の入口で、獸のやうに怒鳴つた者があつた。

「待て！」

一同と共に、瞳が振返ると、それは鬼のやうな怒氣を含んだ、社長の兵吾郎だつた。

「一歩でも、門外へ出た奴は首だぞ！」

ほんの僅かの間、沈默が流れた。と、瞳の言葉に、始めて眼覺めた彼等は、もはや今までの羊の群ではなかつた。

「何を！」

「首にするならして見ろ！」

「おれ達は、正義のために戰ふんだ。」

「あべこべに、こつちから首にしてやるぞ。」

「今に見てろ！」

忍從に忍從を重ねてゐた職工達は、口々にかうした挑戰的の態度を執つて、ともすれば兵吾郎に摑み掛らうとする氣勢さへ示した。中には素速く、小石を拾つた者すらあつた。

それを眺めた瞳は、大聲で制した。

「亂暴なことはしないで下さい。正しい者は、必ず最後の勝利者に極つてゐるんです。最後まで、堂々とやりませう。」

「さア、欺されずに引揚げるんだ！」

さう重岡が叫ぶと、再び喊聲を擧げた一同は、雪崩のやうに表門から外へ流れ出た。

己の一喝が效を奏さなかつた兵吾郎は、眞ツ赤に怒氣を顏に現はして、石油箱を降りたばかりの瞳の

許に駈寄ると、強く彼女の肩を引ツ掴んだ。

「君は……君は何んと云ふことをするんだ。馬鹿者！　私の恩を忘れたのか！」

瞳はわざと艶やかに微笑して、兵吾郎の顔を見詰めた。

「恩？　冗談ぢやないわ。あたし、あんたに恩なんか、塵ツ端ほども受けた覺えはありませんからね。どうか亂暴なことはしないで下さいまし。」

「亂暴ツて。――一體、この仕末はどうしてくれるんだ。」

明かに兵吾郎は狼狽し切つてゐた。

「どうするつて、あたしにお聞きンなつても判りませんわ。尤も、後程お眼にかゝりに、伺ふことは伺ひますけど。……」

さう云ふと、瞳は肩に置かれた手を振拂つて、急ぎ足に一同の後を追つた。

「待てッ！」

「後程、ね。それまでは、大人しくお待ち下さい。あたし、弱い人達には、どこまでも味方になりたいんですから。……」

「田村！　お前も今日限り解雇だ。それから今出て行つた奴等も、みんな首にするからさう思へ。」

「どうぞ御勝手に。首にする、しないは、あなたの御自由ですから。……唯、お斷りしておきますが、

そんなことをしたら、きつとあなたは後悔しますよ。」

「馬鹿！　餘計なことは云はずに置け。」

九

瞳が表門を出て、菓子屋の横の空家へ來て見ると、既に正面の硝子戸は外されて、土間には大きな机と椅子とが數脚置かれてあつた。そしてその側で、重岡が二三の職工に、何か聲高く命じてゐた。今は必死の職工達は、丁度名將の許に働く士卒のやうに、爭議に必要な準備を、着々として調へ始めてゐた。

「今こそ俺達の、本當の力を知らせてやる時だぞ。」

「さうだ、俺達にも意氣はあるんだ。この上は、石にかじり附いても、あの强慾な社長に、勝たなけりやならねえ。」

土間で働いてゐる以外の職工達は、裏の空地に一團になつて、猶も醒めやらぬ亢奮に、思ひ〳〵の說を吐いてゐるのだつた。

瞳が土間へ這入つて行くと、重岡は微笑を以て迎へた。

「社長の奴、何んだといふんです。」

「何んだつて、とてもお話にも何んにも、なりやしませんわ。お前も職工達も、今表門から出て行く奴

は、一人殘らず首だつていふから、そんなことを云つて、後悔しないで下さいつて、云つてやりましたわ。」

「首ですツて？　首が切れるものなら、切つて見るがいゝ。——田村さん！　もう會社中、一人殘らず引揚げましたぜ。いまし方、支配人始め社員の人達も、みんな引揚げて來ましたし。——門衛も給仕も交換手も、みんなですぜ。もう會社は、仕事どころぢやない、空家も同然ですよ。はツはツは。」

瞳が氣附くと、先刻とは人間が變つたやうに、晴れ〴〵した支配人の岡本が、笑ひながら立つてゐた。大方初めて自分の本心に立返つたのであらう。いつになく彼は元氣だつた。

「田村さん。私達も、事務所の中から、あなたの演說を聞いて、早速相談一決、非常な決心で引揚げて來ましたよ。それに、いま會計の松井君から聞いたんですが、本年の上半期の繰越金九萬八千圓の中、五萬圓が銀行の當座から消えてゐるといふことです。無論それには、社長振出しの小切手が銀行から廻つてゐますが、使途不明と云ふ奴で、今以つて社長の方から何んの沙汰もないんださうです。で、社長は松井君に、今期末までには、他の科目で振替るから、このまゝにしておいてくれといふんださうですが、實に怪しからんぢやありませんか。いくら社長の權限があるにしても、株式會社の公金をやたらに、融通するなんてことは。——」

「ありさうなことですわ。でもさう云ふ怪しいと思ふ點は、詳細に書き出してお置きンなる方が有利で

すわ。」

「勿論書き附けて置きます。」

それから瞳は、あらためて重岡に云つた。

「こゝにかうして、大勢集つてゐることは、戰術上不利でせうから、幹部の人だけが殘つて、あとの人達は、一時各自の家へ歸つて、時機を待つて貰つたらどう？」

「さうですね。では、一應自分達の家へ引揚げて貰つて、少數で、資金調達の事や何かを、相談することにしませう。」

重岡は直ぐに裏口の方へ走つて行つた。そして慣れない演說口調で、兎に角この爭議は、相當の時日を要すると思ふから、一旦諸君は自分達の家へ引取つて、我々からの報告を待つて貰ひたい。と、いふ意味のことを喋つた。無論一同に、異存のあらう筈はなかつた。職工と社員達一同とは、再び瞳の口から、この爭議を、決して第三者の宣傳に利用されないやうに、飽くまで自分達の主張を貫徹させることに努力しませう、との言葉を聞かされて、各自に希望を抱きながら、整然として引揚げて行つた。

十

十餘人の主なる者だけを殘して、百人餘りの社員、職工、事務員達が引揚げてしまうと、取敢へず、

二階を幹部の相談所として、無斷出入を禁じ、土間の直ぐ上を控室に、着々として相談が進捗して行つた。そこへ、給仕と少女の事務員とが、紙、筆、硯箱、インキ、鉛筆などの文房具と、藥罐、湯呑、煎餅などを買つて戻つて來た。

早速、庶務課の社員が、大きなハトロン紙に、「武藏車輛株式會社罷業團事務所」と、墨痕鮮かに書上げると、それを戸板に張つて、表へ立懸けた。それから、瞳の注意で、餘り過激なことは書出さないやうにとあつて、「求めよ！　されど働け！」「我々は所謂爭議の爲めの爭議を爲すに非ず、たゞ正當に受くべきものを、團結して求めるに過ぎず」との、二つの俄作りのポスターを、土間の壁に張出したのであつた。

それらの準備が出來た時分に、勝手許で働いてゐた人達が、茶と煎餅とを運んで來た。疲れてゐるせいか、瞳はその番茶に非常な美味を覺えた。

罷業事務所の仕度が終ると、階下には給仕と二三の事務員とを殘して、瞳をはじめ十二人の人達は、そのまゝ二階へ上つた。そしてこゝで二時間餘を費して、合議の結果、兎も角社長大津兵吾郎に提出すべき六つの要求條件は、瞳の手に依つて、鮮かに卷紙へ認められたのであつた。

要求書

一、今回社長の獨斷にて發表されし、給料二割減を撤回すると同時に、一割以上二割以下の增額を

行ひ、以て他同業會社との平均を執られたき事。

二、現在職工夜勤手當は、一時間金二十五錢なるも、之亦他同業會社同樣一時間金五十錢に、社員宿直費五十錢を一圓に、各々引上げられたき事。

三、遲刻早引の場合は、現在一時間毎に金五十錢宛罰金として給料中より差引かるゝ制度なるも、直ちに同制度を廢し、年二期の賞與にて按配せられたき事。

四、社員は月二回、職工は月一回の休日を社員月三回、職工月二回とし、一ヶ年皆勤者には、五日以上十日以下の休暇を給與されたき事。

五、社員及職工服務規定中に、退職手當及傷害慰恤金の條項決定されあるも、曾て同規定に依つて交付を受けたるものなく、總て社長の決裁に依つて決定されたる模樣なり。依て將來は同規定通りに交付すべきを、この際社長自ら一同に言明されたき事。

六、現在本社に共濟組合的のものなし。依つて速かに共濟組合を設立し、相互扶助の實を擧げんと欲す。就ては會社はその設立を認め、同組合設立に要する費用を負擔し、尙創立資金として相當の寄附をされたき事。

右六ケ條を私共一同は當會社代表者たる貴下に要求いたします。一讀下されば直ちに判明するでありませうが、私共は決して無理な要求を提出してゐるのではありません。唯、他の會社同樣の待遇を

この際與へられんことを、お願ひしてゐるに過ぎません。賢明なる貴下は、私共一同の要求を御認容下さるのを確く信じます。その際は一同速かに就業することは、申上げるまでもありません。以上

代表者　田村瞳
岡本達夫
重岡一郎
外百二十三名

武藏車輛株式會社々長　大津兵吾郎殿

瞳がそれを讀み終つた時、階下から來た少女が、彼女に來訪者のあることを告げたのだつた。

十一

「面會ツて、あたしに？」

少女を振返つた瞳は、意外の面持で、かう訊ねた。

「えゝ。西村さんて方です。」

「まア、西村？　どうして急に、こんな所へ來たんだらう。」

さう呟きながら、瞳はあらためて一同の方へ向き直つた。

「あの、あたし面會の人が見えたさうですから、ちよいと中座させて頂きますわ。」

「さアどうぞ」と、岡本が頷いた。

西村――それはおゑんの本姓だつた。

かうした場所へ、彼女が訪ねて來たことは、多少迷惑にも思はれたが、それよりも、突然訪ねて來たといふ事實に、妙に何か暗い衝動を感ぜずにはゐられなかつた。

「直ぐに行きますから、少し下で待つてるやうに云つて頂戴。」

「はい。」

少女が去ると、瞳は直ぐに輕い會釋をして、階段を降りた。

階下へ來て見ると、土間一杯に人が集つて、騷然としてゐる中に、おゑんが呆氣に取られて片隅に立つてゐた。

「何？　急な用？」

瞳がさう聲を掛けると、人々の肩越しにおゑんが頷いて見せた。が、それと同時に、瞳は突然、そこに集つてゐた十人ばかりの背廣服に、取卷かれてしまつたのだつた。

「あなたが田村瞳さんですか？」

「えゝ。」

「ではちよいと、この爭議に就て、お話を聞きたいんですが。……」

一人がさう云ひ終るか終らないうちに、瞳の前には忽ち十數枚の名刺が差出された。と同時に、マグネシュームを焚く音が、突如として周圍から起つた。それは先刻から、二階の協議の結果を待つてゐた、都下の各新聞記者と、寫眞班とであつた。

「濟みません、も少し上を向いてくれませんか。」

「手を擧げて、演說をしてるところを、撮りたいんですが。——」

さうした勝手な註文が、寫眞班の口をついて吐かれた。瞳はまづその註文に對して、いちく色々のポーズを作つてやつてから、記者の方へ向き直つた。

「どうか皆さん、お一人づつでは大變ですから、御一緒にお話いたしますから。……」

さう云つて瞳は土間の上り鼻に立上ると、爭議を起すまでの經緯と、今日まで會社が社員職工に與へてゐた、待遇の大略を話した後、「兎も角、明日六ケ條の要求書を、社長宛に提出することにいたしましたが、それを御覽下さつてもお判りンなりますやうに、あたし達は少しも不當の要求をするのではございませんが。往々他の爭議に見るやうな、自分勝手な、會社當事者を苦しめるための態度を執るのではな

いことを、御承知願ひたうございます。」

「いや、よく判りました。早速その要求書を拜見させて頂けますか」と、記者の一人が云つた。

「はい。いま御覽に入れませう。」

瞳は給仕に、岡本支配人に階下へ來て貰うやうに命じると、新聞記者達に云つた。

「どうか餘り大袈裟にお書きンならないで下さいましね。」

「大袈裟に書くやうなことはしません。事實を事實として報導するだけですよ。」

「何しろ他の會社の爭議のやうに、會社を相手取つて爭ふといふのではなくつて、相手は一人の社長だけなんですからね。その證據には、支配人はじめ、會社の者は、みんなこちらの味方ばかりなんですの。」

「判りました。その爭議として、一風變つてるところが、我々の方としては、特種の興味があるんでしてね。殊にあなたのやうな麗人が、その團長であるに至つては。……」

「まア、麗人だなんて、そんなこと仰しやつちやいやですわ。」

二階から降りて來た岡本は、この光景に、眼を見張つた。

「田村さん！　どうしたんです？」

「新聞社の方ですよ。あなたからひとつ、皆さんに要求書を見せてあげて下さい。」

十二

日はまだまつたく暮れ切らなかつたが、空は灰色に重く曇つて、いまにも時雨が訪れさうな模樣を見せてゐた。

瞳とおゑんとは、爭議團の本部を出ると、そのまゝ堤防の上へと歩みを運んでゐた。

「何よ、おゑんちやん、今頃急に來て？」

「急につて、あんた、ゆふべ家へ歸つて？」

「モチ歸つてるわ。どうしてそんなこと聞くのさ。」

「ぢやアあんたは、虎行さんの惡いのを知つてるのね。」

「虎行さんが惡い？」

「そうらごらんなさいな。知らないぢやないの？」

「おどかしちやいけないわ。今朝あたしが出て來る時だつて、あの人、そんな氣配ちつともありやアしなかつたもの。」

「瞳さん、あんたは駄目ねえ。」

「どうしてさ？」

「あたしが今し方行つたら、虎行さん獨りで、氷枕をして寢てるぢやありませんか。」

「そ、それ本當？」

流石に瞳の態度は眞劍だつた。

「本當も嘘もないわよ。どうでもいゝ職工の爭議なんかに力を入れてる暇に、速く歸つてあげなけりや惡いわ。」

「まア、一體いつからそんなになつたんだらう。――今朝もあんなに元氣でゐたくせに。……」

「今朝。――さうなのよ。虎行さんは、あんたに心配させまいとして、苦しいのをぢツと辛抱してゐたんだわ。あの人、あたしに云ふぢやないの。――本當はゆうべ、瞳さんが歸つて來る前に、急に胸が痛んで、かなり喀血したんだけど、それをいふと、折角努力してる爭議の方がお留守ンなつて、氣の毒な職工達が、どんなに失望するか知れないから、わざと瞳さんには、云はなかつたんだつて。あたしそれを聞いた時は、思はず泣いちやつたわ。」

「俥屋さん！」

瞳は突然、彼方を通る空俥を呼び停めた。

「どうするのよ。」

「あたし直ぐに歸るわ。あんた濟まないけど、今の事務所へ行つて、あたしが急病人があつて歸つたと

いふことを傳へて頂戴。」

そこへ、呼ばれた俥屋が、梶棒をおろした。

「どちらへまゐります。」

「大急ぎで、寺嶋のお稲荷さんの側までやつて頂戴。」

「へい。」

瞳は俥の上から、もう一度おゐんに云つた。

「ぢやアおゐんちやん。賴んだわよ。」

「直ぐ行つて、さういふわ。」

俥が動き出すと、瞳は直ちに輕く眼を閉ぢた。彼女の腦裡には、昨夜から今日にかけての虎行の惱みと、爭議の場面とが、走馬燈のやうになつて、次から次へと展開されて行つた。

島の俊寛のやうに瘦せ衰へた虎行が、純白のベッドの上で、血を吐きながら悶え苦しんでゐる姿。

——あの弱氣な支配人岡本が、猛然と立上つて社長の首を絞めてゐる有樣。さうかと思へば、今別れて來たばかりのおゐんが、實は虎行を愛してゐて、ひそかに虎行と接吻してゐる情景。——そんなグロテスクな妄想が、それからそれへと取止なく腦裡に浮んで、はては想像するさへ不愉快なシーンが、血みどろになつて續くのだつた。

「俥屋さん！」

「へい。」

「その乾物屋の横を曲るのよ。」

「へい。」

だらくゝ坂を降りて、乾物屋の角を曲ると、間もなく見える杜の彼方、そこまで行くと、瞳は五十錢銀貨を、投げるやうに俥夫に渡して、蹴込から飛び降りた。

「濟みませんがお孃さん、もう十錢頂戴します。」

「まア、人を何んだと思つてるの？　あたし始終、三十錢で乘つてる道よ。」

「へえ。でせうがひとつ、急ぎましたから。……」

瞳は面倒臭さうに、十錢の白銅を叩き附けると、そのまゝ駈け出した。

十三

接吻市場

轉がるやうに、瞳が家へ駈込んだ時、虎行はたゞ一人、奥のベッドに横たはつたまゝ、天井を見詰めてゐた。

「まア、虎行さん。」

が、虎行は淋しさうに微笑を投げただけだつた。

「あんたはゆふべ、そんなに惡かつたのに、なぜあたしに默つてたのよ。お醫者には、診て頂いたでせうね？」

「あゝ、診てもらつたにはもらつたけど。……」

瞳はベッドの横に腰を下ろして、いつか虎行の額に手を置いてゐた。蒼白い虎行の額からは、熱と云ふよりも何か深い冷たさが、掌をとほして、彼女の胸に孜々と感じられた。

「でも瞳さん。君、今じぶん歸つて來ちやつてもいゝの？」

「何いつてんのよ。いゝもいけないもありやアしないぢやないの。あんたがこんなだツて云ふのに。……」

「だけど僕、別に大したことはないんだよ。」

「嘘おつしやい。あたしはもう、おゐんちやんから、ちやんと聞いてゐるんだから。——ねえ虎行さん」と、瞳は次第に眞劍な眼差を虎行の上に注いだ。「ねえ、ほんたうにあんた、喀血したんでせう。あたし驚かないから云つて頂戴。」

「そんなことあるもんか。」

「いゝえ、かくしても駄目よ。あんたはあたしが、心配するだらうと思つて、矢鱈にかくすやうだけど、はつきり云つて頂戴。あたし、他人の口から聞くよりも、あんたの病狀は、直接あんたの口から聞かせて貰つた方が、どんなに安心だか、知れやアしないわ。」

虎行は、暫し默つて唇をかんでゐたが、その瞼にはいつの間にか涙が溢れてゐた。

「虎行さん。」

「え？」

「あんたなぜ泣くの。」

「僕、泣いてなんかゐるものか。」

「だつて、そんなに眼に一杯涙を溜めて。——あたしもう何處へも行きやアしないから、安心してて頂戴。それから今いつたお醫者さんは、一體誰に診て頂いたのよ。」

「實は僕、病氣も解つてゐるしするから、まだお醫者には診てもらはないんだ。この前鎌倉の病院から貰つて來たあの藥が、二つばかり殘つてたから、あれを飲んで、氷枕だけしてたんだよ。大丈夫なんだから、そんなに心配しないでね。」

「ぢやア心配しないから、あたしに留守中の出來事を、どんな工合だつたんだか、すつかり話して頂戴。」

「すつかりツたつて、別にそんなに詳しく話すやうなことはないんだもの。唯、少しばかりハンケチを染めたばかりなんだから。……」

この時、慌しくドアを排して這入つて來たのは、おゐんだつた。彼女は袂で額の汗を拭きながら、

凝と二人の樣子を見守つた。と、瞳は追縋るやうな氣持で訊ねた。
「おゐんちやん、あんたどつかこの近くで、有名な内科の病院を知らない？」
「さア、この近くつて云つても、別にそれ程有名な病院はないわ。」
「そんなに簡單に返事をしないで、もつとよく考へてよ。虎行さんをこのまゝにはして置けないんだから。」
「それアさうだけど、せめて山の手の方へでも行かなけりや、虎行さんの這入るやうな病院はないでせう。――あゝ、さうく、いつそ麹町の永井病院にしたらどう？　あすこは普通の病院らしくなくつていゝさうだから。」
「おゐんちやんは、どしてその病院知つてるの。」
「だつてあすこには、去年お澄ちやんが三月ばかり、這入つてたことがあるんですもの。」
「どう？　虎行さん」と、瞳は虎行の顏を覗き込んで、「あんたそこへ行つて見る氣ない？」
「だつて僕、そんなに騷ぐほどぢやアないんだから、捨てるやうなお金を使ふのは無駄だよ。」
「まア、何いつてんの。お金なんかの問題ぢやアないわ」と、瞳は叱るやうに押へた。

煙る太陽

一

焦慮と失望とに、明けては暮れる數日が過ぎた。例へば死刑囚の身にとつて、その最後の一日が十年の歳月にも當るやうに、瞳にとつてのこの三日間は、正に三年の歳月にも相當してゐた。

彼女は思ひがけなくも、日一日と元氣の失せて行く虎行を、朝夕のベッドに見るにつけても、自からの心臟を、鋭いメスで切りさいなまれて行くやうな、苦しさを覺えずにはいられなかつた。天地に晝と夜とがあるやうに、快喜の裡には必らず苦惱のあることを、知らない彼女ではなかつたが、それにしても、自分達二人の間にだけは、明るい月日はあつても、暗いタイムのあらうとは夢想もしなかつたことだけに、突然生命を二つにするやうな、かうした出來事に遭遇しては、刳られるやうな焦慮を繰返さずにはゐられなかつた。

虎行が發病した鎌倉に於けるあの當時は、もとより突差であつたには相違ないが、焦眉の急に迫られると云ふほどの、病狀ではなかつたので、不安のうちにも、どこか遠く燃える希望があつたものだ。が、今度の事は丁度喉きかけた花が、嵐にあつたやうな出來事だけに、彼女の心には何んらの用意もなかつ

た。それ故同じく病床に侍する心にしても、少しの餘裕の持てなかつたのも無理ではなかつた。

おゐんはもとより、カルメン、お民、澄子、ベイちやん、水兵などの急を聞きつけた連中が、夜晝となく病院へ詰駈けて、慰めの言葉をかけてくれるのも、瞳にとつてはむしろ苦痛でさへある日が多かつた。

そればかりではない。一方、爭議を繼續してゐる武藏車輛の爭議團事務所からは、何んらのさうした事情も知らずに、種々の報告をしきりなしに、彼女の許にもたらすのだつた。

今も今とて、事務所からはおゐんを通じて、瞳の許へこの日の經過を知らせに來てゐるところであつた。折から虎行は、食後の疲れであらう。首を深くベッドに埋ずめたまゝ、寢入つてゐるのを幸ひ、瞳は、おゐんと共に、病院の應接間へ出て、山元と云ふ鑄造工から報告を受けてゐた。もとより瞳は、彼等には虎行に關する一端さへ知らしてないので、入院患者は彼女の叔母であると、山元は深く信じてゐた。

「ぢやア、やつぱり會社の樣子はきのふとおんなじなのね。」

「さうです。社長からは未だに、何んの回答も貰はないので、岡本さん始め、重岡さんやみんなは、たゞ焦々した日を過ごしてゐる譯なんです。それに就て、この上は一つ田村さんに、もう一度會社に出て頂いて、社長をやツつけて貰ひてえと、みんなは望んでゐるんです。——どうでせう。御病人でお疲れでせうが、明日あたり一度、事務所へ來て下さいませんか。さうすりやア、みんなはどんなに喜ぶか知れやアしません。」

「さう」と、瞳は大きく頷いた。「あたしが出かけたために、少しでも爭議に燭光が見えるやうなら、こんな嬉しいことはないんですから、明日早速出かけませう。」

「ぢやア、來て頂けますか。」

「えゝ。」

「みんなは、田村さんさへ來てくれれば、きつとどうにかなると云つてるんです。だから歸つてこの事を話したら、どんなに喜ぶか知れやしません。」

おゐんは、ちらと瞳の顏を偷み見た。その眼には明らかに、そんな約束をさせまいとする否定の色が現はれてゐた。が、瞳はわざと微笑のうちに、その視線をさへぎつた。

云ふまでもなく瞳にして見れば、虎行の看護を一時もゆるがせにする氣になれる譯ではなかつたが、また一つには、氣の毒な職工達の身の上を思ふ時、獨り自分の周圍ばかりも考へてゐられなかつた。——あたしの微力によつて、本當に百幾十人の人達が救へたら、あたしはどんなに幸福だらう。——さうも思はずにはゐられなかつた。

二

翌朝、瞳は虎行が小康を得て、安眠を續けてゐるのを幸ひ、留守中のことをおゐんと看護婦とに賴ん

で、麹町の永井病院を出ると、そのまゝ通り掛りの圓タクを呼び停めて、向島の爭議事務所へ向つた。

病院を出る時、萬ケ一のことを考へて、本部の近くの酒屋の電話番號を、紙片に書いておゐんに渡したが、そんな電話が役に立たうなどとは、勿論考へるさへイヤなことだけに、虎行の病狀に就ては、せめて外にゐる時だけは、何も思ふまいときめてゐたのだつた。

九段坂を降りた自動車は、そこから神保町へ出ると、左折して水道橋から春日町、そして坂を右折して本郷の通りへと出て行つた。

と、瞳はいつの間にか、自動車の蹴込に、新しい新聞紙の落ちてゐるのに氣附いて、何氣なしに拾つたが、その裏の社會面に視線を移すと同時に、思はず「あら」と、小さな叫びを擧げずにはゐられなかつた。

素より當然の結果ではあるが、そこには、三段に亙る「花の如き女秘書の獅子吼」と、いふミダシの下に、武藏車輛の爭議の記事を掲げて、その中央に、右手を擧げて演說してゐる彼女の姿が、餘りにも鮮かに出てゐるではないか。

大方瞳の叫び聲に、何か怪我でもしたものとでも思つたのであらう。運轉手はスピードを緩めて、心配さうに訊ねた。

「どうかなさいましたか。」

「いゝえ、大丈夫、ちよつと忘れ物を思ひ出したんだけど、もう構ひませんの。」

「もし何んでしたら、戻りませうか。」

「いゝんですのよ。あとで電話をかければ、濟むんですから。……」

そのまゝ、自動車は朝の街をつゝ走つた。——自分が爭議團のヒロインであるなどとは、夢さら思ひはしなかつたが、それでも新聞を繰返して讀んだり、自動車が次第に目的地へ近着いたりして來ると、流石に瞳の肚の底には、押へ切れない興奮が感ぜられた。

彼女は、わざと圓タクを、爭議事務所の十間ばかり手前で乘捨てた。そして小砂利の道を小刻みに歩いた。

彼女は、事務所の前まで來た時、ふと櫻の樹の下に、一臺のパッカードが停つてゐるのに氣附いた。

「おや！　誰だらう？」

さう思ひながら、それでも瞳は急いで事務所へ這入つた。と、十人ばかりの人達が、妙に固くなつてゐる中央に、茶色の背廣を着た、見慣れぬ老年の紳士が、椅子に凭れてゐるのを發見した。

「あゝ、田村さんだ。」

瞳の姿を見た重岡が、さう云つて立上ると、紳士も共に腰を上げた。

「お待ちして居ました。」

そして彼は瞳に、如何にも馴々しくかう云つて微笑した。

瞳は彼に輕く會釋しながら、その誰であるかを重岡に訊かうとした。と、それと察した岡本が直ぐに言葉を狹んだ。

「會社の取締役の大瀧一馬さんです。實は今度の爭議のことを、大變御心配下すつて、一時間程前にお いでを戴いたものですから、今し方病院の方へ電話をおかけしたところでした。」

「まアさうでしたの。申譯ありません。も少し速く伺はうと思ひながら、つい遲れてしまひまして。……」

「この方が、先程お話申しました、田村瞳さんです」と、岡本が、あらためて瞳を大瀧に紹介した。

「あゝさうでしたか。」

一馬は鷹揚に頷いて、再び微笑を漂へた。

「私は車輛會社の取締役をして居る大瀧ですが、困つた事が出來しましたなア。」

「はい」と、瞳は、何んと附かずに頷いて見せた。

三

「ところで、少し出しやばりの觀はありませうが、このまゝに爭議を繼續して居ることは、互ひの損失ですから、どんな具合のものか、私からお訊ねしたいと思つて、伺つた譯ですが。——どうです。ひと

つ私に、今度の爭議を起された原因とか理由とかに就て、隱さず正直にお話願へませんか。」

「さア、あたくしの口からでよろしければ、いつでもお話しいたしますが。……」

「勿論結構ですとも。どうか公平な事實をお話し下さい。」

そこで瞳は、昨日からの出來事を、有のまゝに大瀧に語つた。大瀧は兵吾郎とは異つて、非常に溫厚の紳士だつた。瞳の言葉に一々頷いたり、「御尤もぢや」と、肯定したりしながら聞き入つた。そして一應瞳の說明を聽き終ると、更めて大きく頷いた。

「で、要求書とかが出て居るさうぢやが、さうですか。」

「はい。唯今、その寫しをお眼にかけます。」

側から岡本が、直ぐにその寫しを差出した。岡本の手から受取つた一馬は、暫し默讀してゐたが、やがて苦笑の裡に、瞳に訊ねた。

「大津君はこれに對して、どう云ふとるのです?」

「實はまだ、御回答を頂戴して居りませんので。……」

「さうですか。いやしかし、これくらゐの要求は當然ぢやらう。よろしい。私が引受けました。六ケ條は要求通りに計ひませう。その換り、この大瀧を信じて、これから直ぐに就業して貰ひたいと思ふが、どうです。」

瞳は、一馬の言葉に僞りがあらうとは思はなかつたが、何分事が事だけに速答する譯にはゆかなかつた。

「果してさうお願ひが出來ますなら、これに越した喜びはございませんが、御速答は出來かねますので、暫く相談いたします間、お猶豫をお願ひします。」

「一應尤もです。では、私はこれから、會社の事務所へ行つて待つてますから、相談が纏つたら、お知らせ下さい。」

「有難うございます。ぢきに御返事申上げます。」

一馬が出て行つてしまうと、直ちに、瞳を初め岡本、重岡と、他に要求書起草委員の十名が、二階へ上つてテーブルを圍んだ。そして、直ちに就業することに決定したのは、それから一時間程後のことだつた。

取敢へず瞳と、岡本、重岡との三人が、相談の結果をもたらして、會社の社長室を訪れると、折から一馬は、兵吾郎に何か諄々と說いてゐるところだつた。

兵吾郎は、大きな口を一文字に結んだまゝ、默つて腕を組んでゐた。

瞳はその部屋の中に、唯一人勇敢に飛んで行つた。そして、大瀧に向つて、直ちに就業する旨を述べた。と、大瀧は如何にも滿足さうに、幾度も太い顎を引きながら頷いた。

「よく任せてくれました。では今日は、骨休めに一日休業して、明日から直ちに就業下さい。それから大津君は、今日限り社長の椅子を去られるさうぢやから、この事も併せて皆さんにお傳へしておいて頂きたい。」

「色々有難うございました。本來ならば、今日から直ちに就業いたします決心でございましたが、ではお言葉に甘えて、今日一日だけ休養させて頂きまして、明日から就業いたしますから。……」

「さうして下さい。工場が一日休むことは、單に會社や我々の損害ばかりではない、國家の損失なのぢやからな。」

「はい。よく判りました。」

「ところで、今度の件では、あんた方も、相當準備の金を遣はれたことぢやらう。まことに輕少ぢやが、これを埋合はせに遣つて下さい。」

一馬はポケットから、袱紗に包んだ紙幣入を出して、三枚の百圓紙幣を取出した。

「これで費用を拂つて、もし殘るやうぢやつたら、皆で、一杯づつ飲んでくれたまへ。」

四

瞳は固く辭退したが、一馬は、無理に瞳の手に紙幣を握らせたのだつた。

「あんた方が、私の一言で、就業の約束をしてくれたことは、非常に滿足です。かうした事は、長引けば長引くほど、世間的に當社の信用にも關係することぢやからな。いや、更めて禮を云ひます。」

「いゝえ、あたくし共の方こそ、大變御迷惑をお掛けしまして、申譯ございません。この上共、何分宜しくお願申上げます。」

「要求書の件は、早速重役會を開いて、實施するやうに計らひますから安心して居るがよいでせう。」

瞳達が、丁寧に挨拶して引取るのを、傍にゐた兵吾郎は、茫然として眺めてゐた。

三人が爭議事務所へ戻ると、このことを逸速く家にゐる職工達へ傳へたのであらう。彼等は入口に雲集して、待つてゐた。そして瞳達が事務所に這入るや否や、一齊に「萬歳」と、叫けんだのだつた。

どの顏も、どの顏も、喜悅と元氣とに輝いてゐた。事實これ程速く、爭議が解決しやうとは、思ひも掛けぬことだつただけに、彼等の歡喜も、並大抵ではなかつた。

直ちに瞳は一切の經過を報告して、爭議打切りを人々に傳へた。一同は感極まつて、やにはに瞳の體を抱上げると、彼女が拒むのを、無理に幾度となく胴上げをした。

それからの爭議事務所は、俄かに祝賀場に變つた。表の立札やポスターは撤回されて、食料や飲料の買出しの使が、四方に走つた。

程なく、土間と裏の廣場とには四斗樽の菰冠が拔かれて、燒するめの香が四邊に漲つた。職工達は、

笑ひ興じて盛んに冷酒を飲んだ。そして遂には廣場の中央で、踊り出したものさへ出て、まつたくのお祭騷ぎに變つて行つた。

すると突然、瞳は背後から呼ぶ一職工の聲に驚かされた。

「田村さん。酒屋へ病院から電話です。」

「え？」

瞳は、はつと胸を打たれて立上つた。

「どつからですツて？」

「病院からです。」

「有難う。」

さうは答へたものの、瞳はまつたく夢中だつた。彼女は近くの酒屋へ飛ぶやうにして辿り着くと、いきなり受話機を耳へ當てた。

「あ、もしく。」

電話に出たのは、豫定通りおゑんであつた。

おそらく虎行に關することであらう。電話を聞いてゐるうちに、瞳の顏は次第に蒼白く變つて行つた。

受話機を掛けると、彼女は慌てて酒屋の店を飛び出した。そして爭議事務所の近くまで行くと、懷

中から取出した紙片に、鉛筆で走り書の筆を執つた。

病人重態との知らせがありましたから、このまゝ失禮します。皆さんには秘密にしておいて下さいませ。御心配をかけるのを惧れて、わざと事務所へは寄らずに歸ります。

田村

岡本様

その紙片を居合せた一少女に賴んで、岡村の許へ屆けさせた瞳は、直ぐに近くの自動車屋へ走つた。

「病人があるんだから、麴町まで大急ぎでやつて頂戴。」

「かしこまりました。」

病人と聞いた自動車は、恐ろしい速力で走り出した。

――病院を出る時、酒屋の電話番號を、おゑんに知らせて來た、その不吉の豫感が、かうした結果になつて現はれやうとは、餘りにも慘い現實だつた。――瞳は云ひ知れぬ焦慮と失望とに、胸の迫るのを覺えた。

五

一分間が、一時間にも當るやうな思ひを繰返しながら、漸く自動車が永井病院へ着いた時は、瞳はめ

まひを感じる程の焦慮に、いらくしてゐた。

彼女は、運轉手に料金を拂ふことさへ忘れて、いきなり二階の病院へ駈け昇つて行つた。

その足音を聞きつけて、出て來たのはおゑんだつた。おゑんは、瞳の顏を見ると同時に、胸が一杯になつたのであらう。何も云はずに、固く瞳の手を握りしめた。その眼には、一杯に涙が浮んでゐた。

「どう?」と、瞳は殊更靜かに訊ねた。

「あれから一時間ばかりして、眼が覺めると、急にひどく喀血して。……」

「また?」

もう瞳は辛抱しきれなかつた。そのまゝ轉ぶやうに、病室の前ハンドルを握つた彼女の手は顫へてゐた。

虎行の枕頭では、永井博士が注射器を執つてゐた。彼女は默つて會釋をすると、直ぐに虎行の頭の方に廻つて行つた。磁器のやうに蒼白く、透明にさへ見える彼の顏は、新らしい枕の上に靜かに眠つてゐた。そこには今朝別れる時の面影は、聊かも跡を留めてはゐなかつた。

瞳は胸に込み上げて來る涙を、凝と耐へた。

注射が終ると、永井博士は、瞳に眼で合圖をした。瞳は默つてその後について病室を出た。

博士は自分の部屋へ、彼女を招じると、聲を落して云つた。

「まことにお氣の毒ですが、あと二日とはもちますまい。誰方かお呼びする方がありましたら、至急そ

の手筈をなさる方がよいと思ひます。」

「はい。」

もはや、この上何事も、訊く勇氣はなかつた。また訊く必要もなかつた。努めれば努めるほど、瞳は胸が一杯になつて、ともすれば不覺の涙が頰に溢れた。

それから直ぐに病室に取つて返した瞳は、おゐんに、虎行の父の許に、危篤の電報を打つて來てくれるやうに賴んだが、これを賴むにさへ、もはや力が盡きてゐた。

おゐんが電報を打ちに出掛けてしまうと、瞳は暫らく一人でゐたいからと云つて、看護婦に病室から出て貰つた。そして獨り虎行の枕頭に坐して、眠りに落ちた彼の顏を凝視し續けてゐた。

彼女の腦裡には、稻妻のやうに、過ぎ來し方の樣々の出來事が閃いた。僅か一年未滿に過ぎぬことではあつたが、二人の間に生み附けられた限りなき思ひ出は、それが淺ければ淺いだけ、彼女に取つては深いものだつた。——自分の身を犧牲にしても——さう思つて暮して來た月日は、不良少女として、世間から後ろ指をさゝれてゐる彼女だけに、餘りにも痛ましく、尊い「時」の歩みであつた。

それからそれへと盡きせぬ絲を手繰つてゐた時、瞳は急に、虎行の「氣持」を感じた。

「瞳さん。瞳さんはどうした？」

虎行の聲は、低かつたが、はつきり聞かれた。

「はい。こゝにゐます。」

彼女は急いで、蠟のやうな彼の手を握つた。

「あゝ、歸つて來たの？　何んだか僕、急に會ひたくなつてね。」

「あたしも、さう思つて歸つて來たのよ。」

「爭議はどうなつたの？」

「勝つたわ。」

「さう、それやアよかつたね。社長があやまつたんだね。ぢやア、もう用は濟んだ譯だから、僕が少し良くなつたら、愈々伊太利へ行けるね。」

「えゝ、行けますとも。」

つい昨日までの虎行は、それ程自身を知らない彼ではなかつた。が、何んとしたのであらう。けふの彼は、死の目前に迫つたのも知らずに、日頃口癖のやうに憧憬れてゐた伊太利への旅を、再び繰返し始めたのであつた。

六

が、瞳の手厚い看護も、また彼女のまごころも天に通ぜず、翌日の夕刻、虎行は、伊太利への夢を繰

返しながら、瞳の兩腕に抱かれたまゝ、永遠の眠りに落ちて行つたのだつた。

危篤の電報で、前夜遲く、虎行の父の高行と、妹の登美子とが駈着けた。が、繼母の貞子は遂に見えなかつた。

父も泣いた。妹も泣いた。父は父の心で泣き、妹は妹の心で泣いた。

おゐんの手から通知を受けたベイちやん、水兵、カルメン、澄江などの連中が駈着けたのは、死の直前だつた。流石に彼等も悄然として、いつもの明るさはなかつた。

それよりも、瞳に取つて意外であつたのは、新たに社長に就任した大瀧一馬が、岡本、重岡を始め、會社の重立つ人々と共に、親しく弔意を述べに來てくれたことだつた。彼女は職工一同からの、眞心に滿ちた香奠を受取ると、聲を上げて泣き崩れた。

その翌日に行はれた葬儀は、思ひ掛けない盛葬であつた。武藏車輛株式會社の社員及職工一同が、半日の休暇を取つて、全部回葬してくれたからだつた。十數箇の花環が、靈前を飾つた。

「瞳さん。虎行は仕合者ぢや。いくつで死ぬるも運命なら、私は決して、彼の死を不憫だとは思はん。それよりも、あんたの、これ程厚い愛の手に抱かれて、死んだ彼は、どれ程本望だか知れやせん。」

高行は、涙の裡に、かう云つて寂しく笑つた。

× × ×

それは、虎行の葬儀が濟んでから、半月程の後、瞳をモデルにした虎行の遺作「久遠の處女」が、偶偶三越で開かれた新興洋畫會の試作展覽會に、嘖々たる好評を博してゐた或る日のことだつた。

今しも、横濱のメリケン波止場から出帆する、歐洲航路のサイベリヤ丸の甲板は、出發時刻が迫るにつれて、相互に投げるテープの波で一杯だつた。

しかもこの時、埠頭とは反對側の甲板上に、獨り寂然と佇んだまゝ、別れゆく故國の風光に、しばし視線を投げてゐた洋裝の女があつた。それは、死の刹那まで、虎行が憧れてゐた伊太利へ、彼の身代りに旅立つ決心の下に、誰一人にも別れを告げることなく、ひそかにサイベリヤ丸の船客となつた瞳だつた。冬には珍らしく暖かい斜陽が、青鏡のやうに和いだ海面に映えて、遙かの水平線上には、沖を過ぎる汽船の黑煙が一條、淡く靡いてゐた。

銅羅が鳴り始めた時だつた。瞳はキャビンに這入ると、急いでペンを執つた。

おゐんちやん。あたしは今、サイベリヤ丸の甲板に佇んでゐます。云ふまでもなく、虎行さんが死ぬまで憧れてゐた伊太利への夢を、あたしが代つて實現しようと思ひ立つたからです。

今日まであたしが歩いて來た途は、或は誤つてゐたかも知れません。が、唯一途の信念に生きて來たことだけは、慚ぢないで濟むと思ひます。伊太利へ行つて何をするか。それはどうか聞かないで下さい。考へないで下さい。懷中には現在僅かに三百圓のお金があるばかりです。でも、心配は

いりません。この瞳は、どこの國へ行つても同じやうに、自分の信念を枉げずに暮すことが出來ますから。――では御健勝で。みなさんによろしく。さようなら。

彼女はかう書き終つてしまうと、ボーイに賴んで岸壁に投げさせてから、再び甲板へ出た。テープの綾は破れて、船體は靜かに動き出してゐた。

その瞬間、瞳は意外にも、岸壁の右と左に、悄然と船を見送つてゐる、二人の老人を見出したのであつた。

その一人は父の田村精一郎、そして他の一人は、虎行の父の阪本高行であつた。(完)

印刷……昭和五年一月十七日初版
發行……昭和五年一月十二日初版
發行……昭和五年一月廿三日三版

書名	接吻市場
定價	金壹圓五拾錢
著作者	邦枝完二
發行者	東京市神田區通神保町一 荒井左吉
印刷所	東京市神田區三崎町三ノ一一八 東京印刷製本株式會社 代表者 荻野德二
發賣所	東京市神田區通神保町一 四六書院 (振替東京四四五四八番)

不許複製

【牧製本】

四六書院發行　株式會社　三省堂發賣

通叢書

これこそは貴下の生活行路のオアシス！　趣味の世界がひろびろとひろがつてゐます。まづお好きなものから一冊！ぜひ——

スポーツ通　廣瀨　謙三著
野球通　橋戸　頑鐵著
國技角力通　三木　愛花著
新劇通　水木　京太著
歌舞伎通　伊原青々園著
映畫通　立花高四郎著
トーキー通　立花高四郎著
をどり通　小寺　融吉著
ダンス通　坪内　士行著
俳優通　川尻清潭　濱村米藏共著
藝妓通　花園　歌子著
上方色町通　食滿　南北著
道頓堀通　日比繁治郎著

カフエ通　酒井　直人著
銀座通　小野田素夢著
日本俗曲通　中内　蝶二著
日本音樂通　田邊　尙雄著
西洋音樂通　小杉　清著
謠曲と能樂通　横井　春野著
西洋料理通　秋山　德藏著
支那料理通　後藤朝太郎著
日本料理通　樂滿齋太郎著
鰻通　入江　幹藏著
天麩羅通　野村雄次郎著
蕎麥通　村瀨忠太郎著
すし通　永瀨牙之輔著

酒通　鈴木　氏亨著
菓子通　三好　右京著
果物通　齋藤　義政著
煙草通　石川　欣一著
洋服通　上原浦太郎著
洋裝通　マス・ケート著
支那旅行通　後藤朝太郎著
探偵小說通　松本　泰著
麻雀通　川崎　備寛著
古今年中行事通　相馬　直胤著
古今いかもの通　河原　萬吉著
洋畫通　中川　紀元著
日本畫通　横川　三果著
園藝通　烏丸　光大著
菊通　中山恒三郎　丸山雄三著
釣魚通　野村　小蟹著
古書通　河原　萬吉著

四六版美裝　定價各七十錢　送料各六錢

二杯咖啡

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black